

菅江真澄資料センター

真 澄 研 究

21号

真澄と秋田の国学者……………	新 野 直 吉	1
講演記録		
遊覧記と全集出版の偉業——内田武志の軌跡Ⅳ…	石 井 正 己	5
菅江真澄と北国の椿伝説……………	永 井 登志樹	29
反故紙と茶色白格子模様表紙に関する一考察		
～くすしの証明と地誌編纂前夜の装幀……………	松 山 修	57

平成29年3月

秋田県立博物館

真澄と秋田の国学者

新野直吉

菅江真澄が鳥屋長秋や鎌田正家などと交わりが深く、秋田在住中の行動や立場などから国学者であると位置づけられていることは周知の事実である。

秋田の近世学術史に研究業績のある渡部綱次郎元県立博物館学芸課長も、本居門の国学者である大友直枝吉言に、久保田藩和学方に関係深い高階輟負貞房が報知した書状を、平成八年（一九九六）刊行の『波宇志別の近世国学』（大森町）に

兼ねて物語申上げていた参河人菅江真澄は、此節寺内の鎌田子（正家）に止宿しているので時折面会することがある。学問はさのみの者でないけれど、諸国を経歴してきたもの故、色々の雑事は能く覚えていて話は甚だ面白い。内々御沙汰があり仙北筋の事、実地にめぐりて上書にあらわす予定でいるらしいから、在所の方へも参るのではないかな。その後菅江翁へも今宵の会席に出られるようにと連絡したところ、明晩なら参るというので、菅江翁も折角ご面会をねがっているということなので、何とか繰合わせて

お出で下さるようお待ちしている。

と平易化した文章表現で紹介しているのである。訳語や用辞には元課長の独自性も見えるけれども、文意はよくわかる。ことに「翁」と表記して真澄に尊敬を示し乍ら、学問は大したことではないと記していることは注目に値する。高階貞房については、この書籍の出版段階でも、まだ正読に辿り着いておらず、「高階輟負（貞房）」とルビを附しているが、「階」を「はし」と読むべきことは、私も共にもっと早く知ってもよかったのである。

本年度の館話で、『平田篤胤』と久保田との逆縁なる話をし、その最たる情景を示している天保十二年（一八四一）の江戸払い久保田居住の幕命による処置を受けての閉居状況のもとで、彼篤胤が五月十一日付書状で、愛弟子でもあり後継者でもある鉄胤に、最たる藩士の妨害者として「高橋ユキエ」なる人名が伝えられていることを、渡辺金造『平田篤胤研究』（六甲書房・昭和十七年）で知ったのが、昭和三十年代だったからである。だが若年の頃は古代日本のことばかり

に関心があつたので、高橋と高階とに書かれるユキエが同一人であるとは気づき難かつたのである。

江戸時代の大国学者が生国の秋田で敬愛されていたであろうということは、自然の感じ方であろうが、自分もそういう先入観を持っており、平田が高階という苗字の藩士を「高橋」と書き、「伴と高橋が肉ヲ食ワント思フ」（天保十三年正月十六日鉄胤宛書状）などと極端な表現をするとは思ひ及ばなかつたのである。

それが平成九年から秋田県立博物館に席を持つに及び、菅江真澄に関する学習をする機会も生起して、内田氏の『菅江真澄全集』の別巻一所収「第十七章高階貞房」を学習するに至り、明確に高階貞房なる国学者が平田嫌悪の立場であることを確認できたのである。平田が「橋」の文字を用いたのは藩公の側近の人を悪しざまに言うに当たり、いわゆる仮称的立場の表現をしたのか、或いは本字を用いたくない程に彼も相手に嫌悪感を持っていたかの何れかであろうと受け止めたのである。

その際私は、そういえば個人的にも後輩筋に高階（たかはし）という苗字の人物が、中国地方に実在したのに、思い及ばなかつたのである。結局「高階輟負」が平田の「高橋ユキエ」と表記した人物であると確認して叙述するのは博物館

に勤務してからになったのである。

その高階が、実際に平田に対して悪人視していたことも右の内田氏の叙述によって、彼のことを詠んだ

父母を捨て欠^ツ落れし頑愚世間に比倫なき醜の篤胤

くなたふれ人の皮著し獣の我身を除て吼ゆる篤胤

人の皮着たるけた物うへなく頑愚かつらの皮の篤胤

というような数首の歌に接し、しかも、内田氏が「巻紙に認めてあるが書翰ではなく、随想であろう」と位置づけられた地の文では、「汝篤胤は君の御蔭はさらにもいはず慈愛を受し二親を捨て欠落し又おのが其程の行状をば人やしらずと思ひ居るか、神をも人をも身を欺く虎皮半質にして傍に人もなけに吼わめくこそかたはら痛、いとく憎さへ思はれ（れ）ば」と述べているのを読むと、篤胤認識は極めて現実的なものであつたことも知られるのである。

久保田藩の和学界で職責もある学者武士は、かくの如く平田篤胤をも観る立場から、菅江真澄をも観ているわけである。その人が自分の長男貞臣の、真澄が藩公義和の思いに応じ献上した『ひなのひとふし』の表紙裏に、「菅江真澄は父貞房主の学の友なり」と記す程の実態を持ちながらも、江戸在学から帰郷した文化八年（一八一二）七月三日の「平吉―大友雅君」と差出人名と宛名を記した書状で、「学問はさのみの

者には有之まじく」と評していることは、内田氏も明記している。渡部元課長がこの書状に注目したことも至当の在り方であったのである。

貞房は真澄を和学方に関係つける任も果たしていた如くであるのに、内田氏も「貞房は藩主の側役として真澄と会い、いち早く親密な交際をむすぶに至ったことと推測される」と考定されている立場に在りながら、また一方で貞房が義和の遺命を重んじ文政七年（一八二四）八月に「平鹿郡へ真澄を送り出してから以後は、真澄と交流したようすを示す資料は全く残っていない」と学問的に明言しているのである。

真澄研究者の誰でもが認めているところと受け止めているが、彼の学問が深さを持った広やかなものであることは、人文科学から自然科学に亘って現代の学問でも充分に教示性・参考性を備えている。既に見たように貞房自身も「色々の雑事は能く覚え居候て、…皆面白く御座候」とその博識は認めていた。だからこれは正確な表現とはならないかも知れないが、博識は表現を変えれば「博学」に通じていると考えられる。

貞房が大友吉言に出している書状で「雑学」に通ずる「雑事」と位置づけたものは、二人の学問、もつと言えば二人の「真の学問」に立脚した上での共通理解も可能なものであったのだと考えられる。半世紀以上も前のことであるが「『大友吉言』

の研究」（『神道史研究』九の1・昭和36年1月）なる小論を書いた記憶によれば、直枝吉言の学問は本居学であった。もちろん式内社波宇志別神社の神主で久保田藩の神道大頭役をも務めた大友家の当主たる彼は、伊勢国松坂の本居家で本居国学を学び、文化五年（一八〇八）春に伊勢を辞し、京都に登り吉田家に入門神主たるべき神道を修めたのであるが、本居学は叔父大友親久が先に直接宣長の直弟子として松坂に学び、しかも若くして客死したという切実なる関係を前提として修められたものであった。眼病があつたかの因縁で江戸で医学も学んだが、吉言の学の中核は本居国学であった。

その吉言と交際のある貞房が、前年歌道で師事していた加藤千蔭を失い、思うところがあつたのであろう、本居門に入門するのである。内田氏はやはり貞房と親交のあつた鳥屋長秋（卯助）と同時の本居入門ならんと考定している。何れにしても本居家は宣長の後嗣大平の代であるが、ここでは宣長の実子春庭や孫の左衛次との文通もあつたことは内田氏の著述にも明示される。

そこで、「秋田の国学者」ということになれば、平田篤胤の存在に論及すべきことになる。平田も亦「本居歿後の門人」と称する国学者であるが、昭和三十年（一九五五）夏に今村義孝教授率いる調査団で、八沢木大友家で直接拝見できた伝

来の「大友直枝宛文化四年三月十四日付平田篤胤書状」を読み、「小生事は故翁御歿故は一昨年と申す年に始めて御名をさえ承り且つ古典をも読み始め候事に御座候」という事実を知って、「国学の四大人」と称される関係でも、平田国学の本居国学とは異なる現実を体験したのである。

実際に松坂の大商人であり、本居学派の幹部でもある殿村安守は平田学を評し、新説で英雄の業だと感服する。学風は本居先生の本意の古学の正統ではないので心服できないが、排斥するのにも負け惜しみだ、と冷静な表現で本居学とは異なることを明言していた。

先に見た鉄胤への書状で、貞房と共に「伴」の肉を云々と記していた人物は著名な国学者伴信友なのであるが、彼も亦篤胤に劣らぬ誇高き個性派の人物であった。初めは二人は親しかったそうであるが、両者高名になるに従って仲違いになり、仇敵的存在になったらしい。その伴先生と貞房は親しかったのである。同じ国学者間でもこのような心情関係であったとすれば、一般に国学者とも言われている真澄についてその学問に貞房等秋田の国学者が如何に感じたかは自明のこととなる。

ただ、身分ある中枢藩士学者の貞房が「面白く」感じたことも、長秋・正家以下の文人達は、「翁の博学」と感じたこと

とであろう。

結びに私見を附言すれば、私は遊覧記を読み、隨筆を目にする度に、『いわゆる“国学”とは違う基礎学問の上に成り立っているな』と感じ続けて来た。謎が解けたのは、平成十八年（二〇〇六）末に刊行の白井永二著『菅江真澄の新研究』（おうふう）を受贈拝読し、第十章「秀雄と曹洞禪」の五四頁に亘る御研究を学習した結果である。彼の初学は江戸時代初期の和学者の如く、寺院勉強や仏典学から始まったものであると知ったのである。

更に、国学者で北日本を特に旅した者は知らない。信淵は少年時代父に連れられて北日本を旅したというが、国学者になつてからのことではない。然るに真澄は一途に北を目指した。海峡を渡るに不都合と知れば、陸奥側を仙台湾沿岸まで旅し、遂に北海道島にも到った。吉田松陰が東北を旅し、間宮林蔵が海峡を確認し、黒龍江を溯つたのと通じているところがあるようにさえ感ずる。

（秋田県立博物館名誉館長）

遊覧記と全集出版の偉業——内田武志の軌跡IV

東京学芸大学教授 石井 正 己



講演風景

一 『菅江真澄全集』 に向かう内田武志と宮本常一

佐々木人美館長さんから過分なご紹介をいただきまして、ちよつと気恥ずかしい感じでここに立っております。秋田県立博物館とのご縁が長く続いて、その間に私も菅江真澄を中心にさまざまな勉強を重ねてまいりました。そして、私たち

は内田武志を抜きに、菅江真澄の問題を前に進めることができないのではないかという思いを強くしました。そこで、この「内田武志の軌跡」という講演を一回二回三回と続け、今日は第四回になります。内田武志の研究が戦前の方言研究から戦後の真澄研究へ大きく動いていくところに、どのような内実があつたのかということを、秋田のみなさまと確かめてきました。今日は、その過程で生まれてきた『菅江真澄遊覧記』や『菅江真澄全集』がどういうものであるのか、それらに基づいて私たちはこれからどういう未来を描いたらいいのかを、みなさまと一緒に考えたいと思っています。

昨年の第三回では、昭和二十八年と二十九年、『菅江真澄未刊文献集』の一と二が出たところまでお話をいたしました。一の「あとがき」では、「従来埋れていた真澄の半身もややあきらかになつた」とし、二の「あとがき」では、「もつと真澄の姿をあらわにする資料をも掲げてゆきたい」と述べています。真澄の半身は明らかにしたが、まだ全体像が見えないという認識だったのです。その結果、『未刊文献集』は

終わりではなく、新たな始まりになりました。研究というのは常に先へ先へと進めていくものですが、ベッドに臥しながらも、研究の意欲は大変なもので、私たちは内田武志から生き方さえも学ぶところが多いわけです。

内田武志は、後に『菅江真澄全集 別巻一』の「あとがき」で、「わたくしは、『菅江真澄未刊文献集』を編述してみ、それを初めて実感することができた。秋田では、真澄という人物に対して、疑惑とともに相当複雑な感情をもって視ていることがわかったのである。つまり、記録に現われた部分はその半身にすぎず、完全な人間像は半ば埋没していて、いまだ全身をみせていないということであつた」と述べています。これは先の二つの「あとがき」を受けています。秋田県には、生まれ故郷の三河と違って真澄の印象が濃厚に残っていて、記録では現れない全体像は埋没していると感じています。内田は肖像画に残されたような真澄の姿を追い求めて、くつきりとした真澄像を描いてみたいと願っていたのだと思います。では、最後に思い描いた真澄像はどういうものだったのかということを、終わりに申し上げてみたいと思います。

そこで、今日は最初に印象深い一枚の写真から入ってみます。ベッドに寝ているのは内田武志ですが、後ろに立つのは

左から宮本常一、奈良環之助、内田ハチ、西谷能雄、小箕俊介です。西谷は未来社の社長、小箕は編集者です。この一枚の写真は、未来社から『菅江真澄全集』が出る前の打ち合わせで秋田を訪れた時に撮られたものです。宮本常一は『菅江真澄遊覧記』『菅江真澄全集』の編者として、内田武志と並んで名前を連ねています。

宮本常一は、明治四十年に山口県の周防大島で生まれ、昭和五十六年に東京都の府中で亡くなります。ですから、内田武志が昭和五十五年に亡くなり、宮本常一もまもなく亡くなってしまったことになります。宮本は郵便局の職員や小学校の先生をした後、渋沢敬三のアチックミュージアムに抱え込まれ、居候として生活します。渋沢のポケットマネーで日本全国を見て歩くことになり、山や島までくまなく歩きます。なかでも、昭和三十五年の『忘れられた日本人』（未来社）は、彼をジャーナリズムに送り出す名著になりました。菅江真澄の関係で言えば、昭和五十五年、内田が亡くなる直前に、談話筆記ですが、『菅江真澄 旅人たちの歴史2』（未来社）が出ています。この一冊は内田の研究に刺激された過程で生まれた一冊だと言っているでしょう。今、著作集や日記・写真集が出て、宮本常一の研究が盛んになっています。

先の内田武志と宮本常一が一緒に写った写真は、やはり印

象的な一枚です。宮本常一の日記を見ますと、これは昭和四十三年十二月の写真であることがわかります。十九日、『真澄全集』刊行打ち合わせのために、西谷・小箕と一緒に上野から急行に乗って、秋田へ向かいます。二十日、内田の家へ行き、秋田銀行の前田頭取を訪ねて『真澄全集』の協力を頼み、再び内田のところへ戻って打ち合わせをし、さらに辻兵吉を訪ねて『遊覧記』の閲覧を頼み、秋田魁新報社へ行つて井上にも『真澄全集』のことを依頼します。『真澄全集』のために秋田の有力者を周到に回っていることがわかります。二十一日は朝から内田の家へ行つて打ち合わせをし、県庁に行つて秘書課と社会教育課を回り、図書館に行つて『真澄全集』の協力を頼み、内田の家に行つて最後の打ち合わせをします。県庁からは奈良環之助が同行していますので、写真は最後の打ち合わせの折に撮ったものでしょう。すでに平凡社の『菅江真澄遊覧記』は完結していましたので、いよいよ『菅江真澄全集』へ動いていくという、そんな時期を示す象徴的な写真でしょう。

二 『菅江真澄遊覧記』の方法

では、まず『菅江真澄遊覧記』に入っていきます。先ほど『菅江真澄未刊文献集』二冊が昭和二十八年と二十九年に出たと

申し上げました。そこから『菅江真澄遊覧記』の昭和四十年までは十一年ほどの歳月が経っています。内田の真澄研究は十一年間の空白を経て、再開されることになります。松山修さんがこの期間に発行された雑誌に載った文章を見つけてくださっていますが、それでも、なお空白だと言わざるをえないところがあります。前回、盲目の少女・須藤春代さんに詩を書かせたことにも触れましたけれども、『春のだいち』の続編などをまとめようとして、いろいろなことがあったのだらうと思います。もつと明確な資料を掲げていきたいのですが、私はまだ謎の十一年間を埋めることができていません。実は、その十一年間に、内田武志を支援した柳田国男が昭和三十七年に亡くなり、渋沢敬三も昭和三十八年に亡くなります。二人の恩師の死を乗り越えて、真澄研究は再開されることになるわけですが、その空白期間を経て、満を持したかのように、内田武志は最晩年まで真澄研究に奔走します。その歩みは見事というほかありません。

大きなシリーズになった平凡社の東洋文庫の中に、内田武志・宮本常一編著の『菅江真澄遊覧記』五冊と内田武志編の『菅江真澄随筆集』一冊が入ります。『遊覧記』1は昭和四十年十一月、5は昭和四十三年七月です。翌年『随筆集』が出ているので、昭和四十年代前半にこれらが集中的に出された

ことになります。私たちが初めて菅江真澄に接した機会を考えれば、この『遊覧記』や『隨筆集』である場合が圧倒的に多いと思います。実は、昭和四十三年は一九六八年ですの
で、真澄の百四十年祭にあたります。この『遊覧記』の刊行に刺激されて、一年遅れで百四十一年忌の墓前祭が開催されることになります。『遊覧記』が広く読まれるようになって、秋田の人々に菅江真澄を思い出させたと云ってもいいでしょう。

この『遊覧記』は日記から和歌などを除いて抜粋した部分の現代語訳であり、合わせて真澄の動きを示す地図を載せました。民俗学者や秋田県人はともかく、多くの人々はこれで真澄を知ったはずです。秋田のみなさまはよくご存知ですの
で、中身には入らずに、ここでは「まえがき」や「あとがき」を載せて、どんな意図と方法でこれが作られたのかを確認してみたいと思います。

1の冒頭には宮本常一の「まえがき」が入っています。『南部叢書』『秋田叢書別集』、柳田国男の影印本と校訂本、さらに戦後の『菅江真澄未刊文献集』を経て、この『菅江真澄遊覧記』五冊に動いていく流れを追います。しかし、「いづれも刊行部数僅少なため、一般の人の眼にふれることが少なかつた」とします。専門家は菅江真澄は非常に貴重なものだ

と考えてきましたが、発行部数が少なかったのも、一般の人が眼に触れるのにはどうしたらいいかという課題がありました。そして、「この紀行文には、あまり上手でない歌が多数に挿入されており、また晦渋な擬古文が今の人たちの感覚にあわず、かえってわずらわしい思いを抱かせた」とします。たくさんの歌は伝統的な旧派の歌であり、擬古文は非常に難しかったのです。

そこで、一般の人にこの文章を読んでもらうために取った方法は大胆でした。まず「それらの和歌の多くを除き」として、上手でない歌のほとんどを削除してしまいます。次いで、「資料として価値あるところを現代文になおし」とし、難しい擬古文を現代語訳にしてしまいます。そして、「菅江真澄についての詳細な研究と、その足跡および著書の解説を加えて読者の理解を助けることにした」とします。和歌を除き、現代文に直し、詳細な研究・足跡・著書の解説を加えたのです。1に内田が書いた「菅江真澄というひと」が研究にあたります。足跡にあたるのは、各冊に入れた詳細な旅の足跡を入れた地図です。日にちまで入れて、真澄が歩いた場所を書き込んだ地図はたいへんな労作です。そして、末尾には著書の解説が載っています。そういう大胆な方法によって、一般の人々が菅江真澄の魅力に触れる機会ができたのです。

さらに宮本は、「本書は今日までの真澄研究の到達点を示すものであり」、それと「同時にこの著書が旅のあり方について読者の眼を大きくひらいてくれることになる」と述べます。ここには、内田武志と宮本常一の分担が見えるような気がします。つまり、「真澄研究の到達点を示す」のは内田武志であり、「旅のあり方について読者の眼をひらく」のは宮本常一であったと思います。「旅人たちの歴史」に関心を持っていた宮本には、日本人の旅を考える大きなヒントが『遊覧記』の中にあると考えていたはずです。『遊覧記』は、二人のそれぞれの関心と分担によって作られたことがはっきりと見えてきます。そして、「この書は今日まで数回も公刊を企てたことがあったが、すべて挫折してしまつて、私などが生きている間にこの書が正しく省みられることはないであろうと思つていた」と述べます。『遊覧記』刊行の喜びの背景には、おそらく渋沢敬三の遺志のようなものがあつたにちがひありません。これまで「内田武志の軌跡」をたどつてきた私には、確かにそう見えます。

内田の「菅江真澄というひと」はわかりやすく書かれた解説です。「常冠り」から「故郷」「旅にでる」「日記」「図絵」「随筆」「明徳館本」と書きすすめ、特に力を入れているのは「医業」のところです。さらに「地誌」「墓碑」「『伊頭園茶話』から

「画像」「菅江真澄年表」で結びます。『菅江真澄未刊文献集』の二にも著作年譜が入りましたが、ここに改めて年表を入れていきます。

この『遊覧記』の1は、長野県から旅して秋田県を抜け、岩手県に行くまでを収めています。「あとがき」を見ますと、『菅江真澄未刊文献集』二冊に収めた文章の多くは、『秋田叢書』で入れることのできなかつた真崎勇助が集めたものでした。つまり、『未刊文献集』というのは『秋田叢書』の補遺という性質を持っていたのです。ですから、『未刊文献集』は『秋田叢書』と合わせて読まないで、真澄の全体像は見えてこないことになります。「わたくしはこのなかに、真澄の著作年譜をくわしく整理しておいた。しかし、本文の研究までにはおよびなかつた」というのは、そうしたことを意味するはずです。

そして、「真澄遊覧記」は、数多い旅日記のなかから、興味ぶかい個所だけを、年代順にとりあげてみようとしている。そして地域的な重複を、できるだけさけてえらぶことにした」とします。真澄が旅した道順に従つて、1から5まで構成していくのです。「男鹿五風」としてまとめることにしたために、『男鹿の秋風』の扱いだけは異例で、年代順にしていまませんが、基本的には年代順の配列です。「興味ぶかい個所」というの

は、後に「当時の常民生活が、日記のなかにこくめいに記しとられている」とあるのを指すのでしょうか。「当時の常民生活」を優先するというのは、柳田国男の影響を強く受けているからです。

そして、内田は、「原文は真澄独特の擬古文であつて、このままでは理解にくいので、現代語に訳すことにした。編集部の方針によつて、法政大学講師杉本圭三郎氏が一応訳稿をつくつてくださった。注解は共編者宮本常一氏が主に当たつたが、なお自然方面に関する注解には妹内田ハチもたずさわつた。解説は原本の体裁を伝えるものとして、内田の分担ときまつた」と作業分担を述べます。平凡社編集部の意向があつたと思いますが、東洋文庫というのは、実は外国語の文献の翻訳が一つの特徴になっています。ですから、真澄の現代語訳という企画はこのシリーズにびつたり合つたはずです。軍記研究者の杉本圭三郎さんが訳稿をつくつたというのは意外ですが、『真澄研究』第十一号に「菅江真澄の文体」という講演記録が残されています。先年お亡くなりになりましたので、これは貴重な証言になります。現代語訳の後の注解は宮本常一が主に当たり、自然方面に関しては妹の内田ハチが協力したことがわかります。ハチさんはそうした作業を通して、真澄に対する理解を深めたにちがいありません。解

説は内田が書いていますが、これがやがて全集につながることは明らかでしょう。まず杉本圭三郎が訳稿をつくつて、それを内田武志が直し、宮本常一と内田ハチが注解を付け、内田武志が解説を書くという分担で進められ、これがうまくいつて、五冊が順調に刊行されたのだとわかります。

三 『菅江真澄遊覧記』で気づいた日記の変化

次の『遊覧記』2には、岩手県から北海道にかけての日記が収められています。注意されるのは、内田の「あとがき」の、「日記にも、毎日ことあるごとに歌をよみ、感慨をのべているので、真澄を放浪の歌人のように見る人も少なくないようだが」、「彼の本体は他にあつたと思つている。真澄が旅に立出る以前に修得していた本草学や国学の基礎知識が、はたして実際に当たつてどれだけ役だつものか、旅先でそれを試みてみたかつたらいいのである」とする点です。内田は、「放浪の歌人」という見方を捨て、「本草学や国学の基礎知識」を取り上げるのです。真澄の歌は、柳田国男以来、下手な歌だと見られてきましたが、これについては錦仁さんが批判されて、この十年くらい真澄の和歌の読み方は大きく変わってきています。それはそれとして、内田はこの「本草学や国学の基礎知識」が「みごとに生かされた」と見ています。

また、『遊覧記』1が出たときに、「注記と本文の地名に誤りがある」という読者の反応があったようです。それがむしろ大きな励みになったようで、やはりさまざまな協力者を得て、このシリーズの刊行に拍車がかかります。

そして、『遊覧記』3には青森県の下北から津軽にかけての日記が入っています。「あとがき」に、「真澄は旅先で、その荷物をたしかな宿にあずけておき、いつも身軽になって近辺をあるきまわる習慣があったようで、日記を読むと、よく同じ場所にもどっているのは、また荷物をうけとる必要があったからだろう」という推測があります。確かにあれだけ大量の本を持つては歩けないので、荷物を預けておいて、近辺を歩きまわって荷物を取りに戻ったと考えるのです。旅程を地図に落としていく作業によって、真澄の移動の癖がわかったのでしょうか。

また、「このように何よりもだいじにしていた日記を、思いがけない嫌疑から津軽で押収されなければならなくなつたのは、真澄にとつて大きな傷手であつた。しかし、これを転機に彼はいちだんと成長をとげた」と見えています。そして、「もはや故郷にもどる気持をまったく捨て去つて、あくまでもみちのくにふみとどまり、自分なりのやり方で見聞記録を書きのこそうという決意は、いよいよ強固になったようであ

る。秋田にきてからの日記には、いちども帰国の望みを語っていない」とします。やがて帰郷の問題が出てきますが、この時点では帰国の望みを語っていないと述べています。

この3は青森県でしたので、秋田県以外の協力者が必要になり、弘前の森山泰太郎、三沢の中道等といった人の協力を得ながらまとめたことを述べています。

そして『遊覧記』4ではいよいよ秋田県に入ってきます。「真澄が津軽で書いた日記は、数多い彼の旅日記のなかでも特に精彩をはなつている」が、それゆえに「藩役人の嫌疑をうけて、日記の大半を没収されてしまい、今は草稿しか残っていない始末になった」と述べます。そして、津軽から秋田県に來ると、「その内容にいささかの変化が起こっていることに気づく」と指摘します。採葉係をしていた津軽では「本草などの現地的・実証的な方法」であつたが、秋田県に來てからは、「しだいに歴史的・懐古的な方法」に変えたと見るのです。現代語訳をつくり、解説を書いていく作業を通して、日記を正確に読み、本文に入つてものを考えるようになってきたことがわかります。

そして、諸国民謡集の『ひなの一ふし』とともに、『百白の図』に触れています。実は、白のコレクションである『百白の図』が初めて公開されたのは、この『遊覧記』4でした。

編集部の福岡多恵さんが国立国会図書館にあることを見つけてきて、未発表であるから載せたのです。この『百白の図』は、その後、菅江真澄が一度故郷へ帰ったのではないかと推測する根拠になっていく点で、問題作だったわけですね。『百白の図』の影響もあって、「このころ真澄は紀行文よりも図絵を多くかこうとしている」、「意識して図絵を中心とした日記を編んでみようとする意欲があった」というのも大きな発見だったと思います。『男鹿の秋風』は4に入れないで5に回し、「男鹿五風」というまとまりにしたことも述べています。

四 『菅江真澄遊覧記』完結と『菅江真澄随筆集』

最後の『遊覧記』5は秋田県の残りの日記を収めましたけれども、重要なのは、末尾に「日記から地誌へ」として「駒形日記」「高松日記」「雪の出羽路雄勝郡」をあげていることでしょう。雄勝郡を調査した記録を入れて、日記から地誌への移行期を明らかにするのですが、そういう意味では、日記から逸脱していきます。でも、ここまで入れて、最後に「菅江真澄著作目録」という著作リストを載せています。

この「あとがき」は、「菅江真澄が文政十二年（一八二九）七月十九日に没してから、今年（一四〇）年目にあたると」始めます。内田は真澄の没年から昭和四十三年は

百四十年目になると数えていて、そういう思いの中で『遊覧記』5が出るのです。『遊覧記』は百四十年を意識して刊行したわけではありませんが、結果的に百四十年を引き寄せる形になったと考えることができそうです。『遊覧記』は5で終わりますから、「あとがき」は非常に長くなっています。

この中に奈良別家に残された実話が出てきます。奈良別家で、「あるとき、家人が真澄の部屋にはいつて行くと、あわてて何かを机の下に隠した。再び家の者が行ったときも同様に真澄が隠したようであった。そこで家人は怪しく思い、「これほど親しくしている間柄でありながら、隠しごとをされるのは心外である。これはいったいどういうことか」となじった」というのです。そこで、真澄は「今さら隠しても仕方がないから知らせよう。江戸に居られる藩主義和から、秋田の状況を書いて送れと言つてこられたので、那珂通博が命ぜられて書いたが、その文章の添削をわたしに乞われたので、それを他人には見せまいとしたままだ。学館（明徳館）の助教が、うちの先生へ物を尋ねてよこしたことを、家人から世間に流布されるようでは学館の名折れになると思ったからだ」と話したそうです。那珂通博が書いた文章を添削するというのは出過ぎたことになるわけなので、それを知られたくないと思つて隠したということです。

そして、藩主から「秋田の状況を書いて送れ」と言ってきたのは何かと考えると、その「文書は、おそらく『風俗問状答』であつたろう」と推測するのです。ここでにわかに『秋田風俗問状答』が話題に上がってくるわけですが、戦後まもなく、『真澄遊覧記』と『秋田風俗問状答書』を比較して、関係が薄いと述べていたことは、前回の講演でもお話ししましたが、ここに来て見方が少し変わってきたことがわかります。

さらに注意されるのは、『遊覧記』は大変よく読まれ、読者からさまざまな反応があつたようです。それまで真澄については、秋田人と研究者以外には関心がなかったのに、一般の人々が真澄に触れる機会となつて、全国で読まれるようになります、その中で二つの資料が出てきたのです。

第一に、長野県の洗馬の熊谷家が持っていた『筆のまま』に「源秀超」という名前が見えます。それが真澄とどのように関わるのが問題でしたが、愛知県の水谷源二郎から手紙が来て、丹羽嘉言の『膽吹遊草』その他に「白井超」「白井秀超」という名前があり、これは若いときの菅江真澄の名乗りであろうと言われました。『膽吹遊草』は、安永九年、一七八〇年、近江国の伊吹山に採薬に出かけた紀行文であり、採薬という点で、津軽滞在の生活と一挙につながります。それまで旅立つ前の真澄のことはわかりませんでした、その時期のこと

がわかるようになったのです。

実は、『真澄研究』第二十号に、松山修さんが「内田武志における丹羽嘉言論の形成」という論文を書かれていて、このあたりの事情が実によくわかります。昭和四十二年三月に水谷源二郎から一通目の手紙がきて、合計七通あるそうです。ですから、『遊覧記』の3が出た後、それらを讀んだ水谷源二郎が内田武志に手紙を寄こして、二人の関係が始まつた経緯が克明にわかってきました。

もう一つ出てきた資料は、岩手県一関の八巻一雄が真澄の所持していたという『和歌秘伝書』を発見して、教えてくれたことです。真澄は長野県から東北地方へ向かうときに、洗馬の長興寺の洞月上人から『和歌秘伝書』を与えられ、それを持ち歩いていたのです。洞月上人は「遠い見知らぬみちのくの旅の生活を、少しでも容易にしてやろう」という心優しい思いやりから、この『和歌秘伝書』を授けたのだらうと推測しています。それだけでなく、真澄は宮城県栗原郡金成町の金田八幡の別当量海にこれを授けていますし、岩手県西磐井郡山ノ目の大槻清雄に授けたものも見つかりました。真澄自身が『和歌秘伝書』を授けながら旅をしていたことがわかってきました。

すでに述べたように、『遊覧記』五冊ではほとんど削除し

てしまった和歌が、ここに来て、大きな問題になってきました。歌人として『和歌秘伝書』を携えた真澄の行動を再認識しなければならなくなってきたのです。その結果、「この形式的な歌と難解な擬古文体の日記の書き方も、この秘伝書に規制されて、中世以来の紀行型式を踏襲しなければならなかったのではないか。しかし、そのなかに盛られた真澄のもつ新鮮な観察眼による見聞記は、あきらかに近世の思考である」とします。「形式的な歌と難解な擬古文体の日記」というのは否定的な見方ですけども、そこから「新鮮な観察眼による見聞記」が生まれたと見ます。中世と近世が出会うところに、この真澄の日記が生まれたと考えるのですが、そこに至りつく前提として、『和歌秘伝書』の携帯を重視せざるをえなくなったのでしょうか。

そして、「なおこれから、真澄が旅日記をやめてから書きだした随筆と地誌のなかから、価値あると思われる部分を選び、引き続いてまとめていく予定である。この『遊覧記』の多数の読者から寄せられた、「原文を読みたい」というご希望にも、そってゆきたい」と述べます。現代語訳を読んだ一般の読者から「原文を読みたい」という希望が寄せられたので、かつて内田自身が編んだ『菅江真澄未刊文献集』二冊から引用してまとめたと思います。しかし、『遊覧記』

の「原文を読みたい」とする読者の思いは、「随筆と地誌」を出したいとする内田の意向とはややすれ違っていたようです。

翌昭和四十四年に出たのが『菅江真澄随筆集』です。この『随筆集』は当初から計画されていたわけではなく、『遊覧記』がすぐよく売れたので、平凡社は内田武志の希望を入れたのだと思います。これは『未刊文献集』二冊から取り上げた『水の面影』『筆のまにまに』『しのはぐさ』『久保田の落穂』『かたみ袋』『発掘の家居』『新古祝壺品類之図』の七編に、『ひろめの具』を加えた随筆集です。先には「随筆と地誌」を考えていたので、「地誌」も入れたかったようですが、実際には「随筆」だけでまとめています。

その「あとがき」では、「久保田(秋田)に定住するようになってから真澄は随筆を相当たくさん執筆している」が、それは普通の随筆と違って、実際の現場に立つて「多数の常民の意志として存在した事実をつとめて記そうとした」ので、これは「われわれ人間の歴史を探る上で、もつとも必要なことである」と説きました。そのようにして、かつての『未刊文献集』を広い読者に向けて出したのが、この『随筆集』だったと見ることができます。そのときには秋田の畠山重悦と鷲谷良一、名古屋の長沢詠子の協力がありました。しかし、この『随

『筆集』は評判が悪かったようです。それはあとで触れてみたいと思います。

五 『菅江真澄研究所報告』と『菅江真澄の旅と日記』

この『菅江真澄遊覧記』『菅江真澄隨筆集』から『菅江真澄全集』に移る間に、『菅江真澄研究所報告』という雑誌が四冊出ています。菅江真澄研究所は内田の自宅に置いた研究所です。これも松山修さんが詳しく調べてくださって、今回全容を教えてくださいましたので、私も読むことができました。

1が昭和四十五年三月ですから、『隨筆集』の刊行後になり、4が昭和四十七年七月ですから、もう『全集』の刊行が始まっています。『全集』が始まると、この雑誌はそのまま月報に譲ることになったにちがいありません。1から4までのようなものが載っているかという内容をあげておきました。

『菅江真澄研究所報告』1（昭和四十五年三月）

真澄遊覧記その後

内田武志

謎の旅人

鷺谷良一

真澄翁の眠る資料を求めて

畠山重悦

信州洗馬の新発見本

無記名

図絵を読む楽しさ

内田ハチ

『菅江真澄研究所報告』2（昭和四十五年七月）

蝦夷錦

内田武志

真澄の描いたミヤコドリ

長沢詠子

『菅江真澄研究所報告』3（昭和四十六年二月）

奈良環之助氏追悼記

内田武志

河北文化賞 受賞のこと

内田ハチ

真澄の歌碑

内田武志

真澄と美濃・木曾路

長沢詠子

円満寺に真澄の草稿を求めて

鷺谷良一

『菅江真澄研究所報告』4（昭和四十七年七月）

真澄の贈り物

内田武志

三河の菅江真澄

長沢詠子

真澄未発見本の搜索余録

鷺谷良一

通信

土屋雅夫

思い出の人々

長谷部哲郎

通信

松野武雄

白井秀超について

内田ハチ

通信

井坂敦

先ほど協力者として名前が挙がった鷺谷、畠山、長沢といった方々の文章がいくつも載っています。「奈良環之助氏追悼記」については後で触れます。「河北文化賞 受賞のこと」があります。内田は昭和四十六年一月に河北文化賞を受賞

しています。この時期になると、内田武志の偉業が世間で評価されるようになって、河北文化賞の受賞、後には柳田国男賞の受賞というような輝かしい受賞も舞い込んでくることになります。

1に、内田の「真澄遊覧記その後」があつて、この時期の動きを知る手がかりになります。「ちかごろ菅江真澄に対する関心が相当地に高まつてきたらしく、わたくしのところへも問い合わせが各地からくるようになった」とあります。『菅江真澄遊覧記』五冊は新たな真澄ブームを起したにちがいありません。これについて、「現代語訳だつたせいでもあるろう、真澄の読者層を全国に拡大することができたことはたしかである」と述べます。宮本常一が言っていたような「一般人」の真澄ファンを全国に拡大したのですが、何と言つても大きかつたのは現代語訳だつたことでしょう。秋田県人だけでなく、わかりやすい菅江真澄に多くの人が触れる機会を得て、その魅力に取り憑かれていったのです。その際に、「このような訳文でなく、真澄の原文を読みたい」という希望が生まれました。それに応えるように、『菅江真澄随筆集』は「真澄の考証を主とした随筆を原文のまま挙げた」のです。しかし、「晩年になって博学ぶりを表明したこの随筆集は、予想外だつたらしくあまり興味をもってくれたようではない」と

述べます。『遊覧記』は全国の読者に大きな反響を与えたので、その先にあつた真澄の随筆を、読者の要望に応じて原文で示したのに、読者は意外に冷たかつたのです。この落差はとも注意されることで、私たちが心に刻んでおかねばならないことです。内田は読者の反応が冷たかつたことに、たいそう驚いたにちがいありません。

でも、『遊覧記』5の「あとがき」で、内田が「今年はちょうど一四〇年目にあたる」と書いたのに刺激され、鷲谷良一が奔走して、昭和四十四年、一年遅れの墓前祭が百四十一年忌として行われ、『菅江真澄翁墓前祭記録』としてその年に出版す。昭和三年の百年祭に次ぐ大きな墓前祭で、盛大な行事としては四十年ぶりだつたにちがいありません。『遊覧記』五冊の成功に刺激されて、戦後になって秋田の人びとが忘れていた菅江真澄を思い出す機会になつて、一年遅れで百四十一年忌を催すことになつたのだらうと思います。座談会の記録も載っていますし、柳田国男が昭和二年に行った講演も、赤川菊村の筆記で『仙北新報』に載つていたものが再録され、とても貴重です。これが一つ目の動きです。

二つ目の動きが昭和四十五年一月の内田武志・浅井敏・伊奈繁次編『菅江真澄のふるさと』（私家版）の刊行です。これは岡崎の浅井、印刷業の伊奈といった人たちと一緒になつ

て出しています。この中に内田は「菅江真澄のふるさと」を書き、最後に愛知県に関する資料が載っていますけれども、それを提供したのは内田でしょう。それに先立って、昭和四十四年に『日本庶民生活史料集成 第三巻』（三一書房）が出ています。日記から七冊の原文を抜き出したもので、内田はその解題や注記を書いています。

そして、「わたくしは現在、『菅江真澄全集』（全十一巻、未来社）の編集にあけくれている。その第一巻が発刊されるのは今年の六月ごろになる予定となっているから、内容見本はそのうちにできるであろう」とあります。第一巻の刊行は、実際には翌年三月になります。内容見本については後で触れます。「しかし全集がでるまえに、まず啓蒙的な解説が必要ではなからうか」と考えます。『遊覧記』五冊の成功と『随筆集』一冊の失敗を考えてみると、『全集』が出て、人びとは菅江真澄を理解できないだろうと判断したのでしょう。「原文のままの紀行日記を読むひとの手もとにおいて、まずその内容と範囲が容易に理解されるように配慮するのが親切というものではないだろうか」と考えて、昭和四十五年五月に未来社から『菅江真澄の旅と日記』を出します。これが三つ目の動きです。

ですから、『菅江真澄の旅と日記』は『全集』を読むための「啓

蒙的な解説」と考えていたことになります。『全集』は第一巻から第四巻までが日記ですから、これらを読むのにはとても役立つと考えたはずです。『遊覧記』五冊は図版をほとんど入れていませんでしたが、『菅江真澄の旅と日記』には図版を百十枚も入れています。

この『菅江真澄の旅と日記』は、「はじめに」があつて、「伊那の中路」「わがこころ」「くめじの橋」から始まり、「軒の山吹」「勝手の雄弓」「月のおろちね」で終わり、「菅江真澄年表」「あとがき」で結んでいます。『遊覧記』五冊の解説をもとにして書き直していますけれども、『遊覧記』にはなかった新たな情報を入れています。だいたい『遊覧記』の順序ですが、後に『全集』に収録される内容も入れ込んでいます。最後の「菅江真澄年表」は『遊覧記』1の年表とよく似ていて、あまり大きな違いはありません。内田は年表をしつかりつくることに執着していたことがわかります。

先の『菅江真澄研究所報告』1の中に、内田自身が書いたと思いますけれども、「菅江真澄の旅と日記」の案内が出ていて、「秋田に永住するまでの旅日記のうち、現存の五十数冊について解説した」とし、「その期間にまとめた数冊の写生帳や民謡集、新らたに発見された「和歌秘伝書」、渡道当時の事情を語る「蝦夷錦」などの説明は、多数の図版とともに

に、目新しい」と加えます。この案内のとおり、注意されるのは岩手県で発見された『和歌秘伝書』で、宮城県から岩手県に移る流れで「和歌秘伝書」に触れています。北海道へ移る「松前上陸」でも、真澄から鈴木常雄に送られた『蝦夷錦』という書簡に触れています。

この「あとがき」では、菅江真澄の肖像に触れながら、石井忠行編『伊頭園茶話』を引き、「真澄の私生活はまことに質素で、食物は、どんなものを出されても、うまいともまずいとも批判がましいことは言わなかった」と言います。日記を見ても、食べ物の記事は非常に少なく、日常生活を書いているながら、毎日なにか食べていたはずなのに、ごく日常の部分はほとんど出てきません。秋田では、「真澄は食い気と色気に無関心なひとだった」と語るむきがあるそうです。美食家ではなく、結婚せず妻子も持たなかったことを指すのでしょう。でも、内田は、「真澄は何よりも自由を望むひとだったから、束縛よりもむしろ孤独をえらんだのだろう」と考えます。食い気とか色気とか、「常識的欲望を犠牲にしよう」という決心をしていたのであろう」とも言っています。それは、「世俗に抵抗する反逆」でもあり、「これまでとは異なった道をきり開いた先駆的な行為」でもあり、それゆえに「神秘的な人間」として評価されていたのではないかとします。そし

て、「常冠り」に触れ、「若年のころ負った刀痕を隠しているのだ」とか、「業病が起つたので頭巾をはなさないのだ」とか、いろいろな憶測についても述べています。

そして、戦後始まった研究が、「いくども絶望をあじわいながらも、ようやくここまでたどりついたところである」という感慨を述べます。血友病を抱えていた内田は、「真澄に做つて、できるだけ食物の不平は言いたくないと思っているが、昨今のように人工甘味、防腐剤や漂白剤を入れて着色した食品ばかりが店頭にあふれる状態では、よほど注意しないと、胃腸をいためやすい」ということまで述べています。「今春からこの夏にかけて、腎臓出血が二カ月余続いて、あやうく最後をむかえるところであつた」という経験があつたからでしょう。それでも、『菅江真澄全集』を、この機会に編んでみようと決心したのである」と述べます。冒頭で見ました宮本常一と内田武志の写真が昭和四十三年十二月で、この「あとがき」が書かれたのが昭和四十四年十月ですので、すでに『菅江真澄全集』へ動いていました。そして、最晩年の真澄の歌、「いつ万代も筆の命も長らへて書きながさばや水茎のあと」を引きます。生きながらえて書き続けたいという真澄七十六歳の思いです。このとき内田は六十歳の還暦ですので、血友病を抱えながらも、還暦まで生きたという感慨はあつた

でしょう。七十六歳の真澄が「いつ万代も筆の命も長らへて書きながさばや水茎のあと」と詠んだ歌は、自分の思いと重ねられたはずです。

六 『菅江真澄全集内容見本』からわかること

さて、『菅江真澄全集』に移りましょう。一覧にしてみますと、すべて内田武志・宮本常一編で、第一巻から第十二巻までと別巻一・別巻二から構成されます。第一巻が昭和四十六年三月の刊行、最後になっているのが第十二巻の雑纂2で、昭和五十六年九月の刊行です。刊行順が動いている巻もありますし、別巻一の「菅江真澄研究」は途中の昭和五十二年十月に出ています。本文が出てから別巻が出るのが普通であり、完結した本文を踏まえて書くべきだろうとも思っています。ところが、内田は刊行途中の第九回配本で、「菅江真澄研究」を書いてしまうのです。完結を待つて書こうと考えていたならば、ついに「菅江真澄研究」は書かれなかったかもしれないので、結果的にはよかったと思います。内田は昭和五十五年十二月三日に、七十一歳で亡くなっていますので、第十一巻と第十二巻の雑纂二冊は没後の刊行になります。この全集はなお問題を抱えていて、別巻二の「索引」を次回配本としながら未刊のままで、昭和五十六年九月から

三十五年が経過しています。今、その用意があると聞いていますので、これが完結できれば、私たちにとっては大きな財産になります。どのような索引になるのかが問題ですけれども、これで引いて読むことができる便宜が図れることになり

ます。先に「内容見本はそのうちにできるであろう」と述べていました。その予告について、まず『菅江真澄研究所報告』から引つ張りだしてみます。昭和四十五年三月の1の「菅江真澄全集刊行の予告」では、編集者は内田武志・宮本常一・奈良環之助の三人になっています。しかし、奈良環之助はこの年十一月十六日に亡くなっています。四ヶ月後の昭和四十六年三月の第一巻発刊のときに生きていたならば、奈良環之助の名前はずっと残ったはずですが、しかも、当初は全十一巻、別巻一冊でした。構成は日記が四巻ではなくて五巻、地誌が四巻ではなくて三巻、随筆が一巻ではなくて二巻、雑纂が二巻ではなくて一巻になっています。別巻は「真澄評伝と年表及び索引」で、「評伝と年表」と分けたのが気になります。これが後に「菅江真澄研究」としてまとまりますが、逆に「年表」は入りませんでした。

昭和四十六年二月の『菅江真澄研究所報告』3はもう『菅江真澄全集』刊行の直前です。『菅江真澄全集』には、編集

は内田武志・宮本常一として、「刊行のことば」が出てきます。

「この内容見本のためにお寄せくださった諸先生がたの文章からもおわかりいただけるように」とありますので、これは内容見本を踏まえてまとめたことがわかります。それらの文章によると、菅江真澄は「遊歴文人」、「民族誌の作者」、「植物学者」、「日本民俗学の先駆者」、「孤独な文学者」、「風景画家」など、さまざまに言われています。あとで内容見本に触れますが、いろいろな分野の第一線の研究者の菅江真澄の見方は微妙に違って、多様な視点から真澄が認められていることがわかります。さらに、「独自の方法をもつてそれを記録した類稀れな実証主義者」であり、「近世日本に芽生えていた実証主義の精神を、いま、現代の光のなかで捉えなおそうとしている」として、真澄の「実証主義」を強調しています。末尾には奈良環之助が死んだことも出てきます。

次に、『菅江真澄全集内容見本』を見てみましょう。編集は内田武志・宮本常一で、全十一巻ですが、別巻二になっています。「刊行のことば」は未来社の文章になっていて、末尾には奈良環之助の他に、推薦文を寄せた東京大学の泉靖一も刊行前に死んだことが書かれています。泉の死去は昭和四十五年十一月十五日ですので、内容見本はそれ以降に作られたことがわかります。これには「推薦のことば」として

十三人の文章が載りますので、並べておきます。

未来社版菅江真澄全集をすすめる 有賀喜左衛門

秀れた民族誌作者の菅江真澄 泉靖一

年々高まる紀行文の声価 大藤時彦

本草学の興味ある記録 奥山春季

すぐれたヒューマン・ドキュメント 木下順二

真に価値ある全集 西郷信綱

菅江真澄集の刊行を慶ぶ 佐竹義栄

親しい先人、菅江真澄のこと 瀬川清子

菅江真澄全集の刊行をよろこぶ 高倉新一郎

庶民生活研究の原点 竹内利美

各分野に有益な全集 千葉徳爾

菅江真澄と柳田国男 堀一郎

暖かいふれあいを通して庶民を描く 益田勝実

真澄に対する見方は先に述べたとおりですが、社会学者・文化人類学者・民俗学者・植物学者・劇作家・国文学者・藩主末裔・歴史学者・宗教民俗学者など多彩な顔ぶれであることに驚きます。これは真澄の価値が各方面で認められたことを示します。

社会学者の有賀喜左衛門は、「当時の庶民生活を忠実に記した」「遊歴文人」と見ます。刊行直前に亡くなった文化人

類学者の泉靖一は「日本の実証主義者」が残した「秀れた民族誌である」とします。泉は「実証主義」という言葉を何回も使っています。先の「刊行のことば」はこれを受けているのでしょうか。民俗学者の大藤時彦は、民俗学者ですから、「日本民俗学の先駆者」と呼んでいます。植物学者の奥山春季は、「真澄翁が採録された植物の方言の追究には実地調査によるのが最後に残された問題でしょう」ということを、内田ハチと話したことを書いています。鹿角出身の民俗学者の瀬川清子は、「民俗採集者の先駆」と微妙な言い方をします。この当時、「民俗採集者が聞く者と聞かれる者との関係を反省している」ことが念頭にあったようです。民俗学者の千葉徳爾は狩猟民俗を研究したので、真澄が取り上げた津軽黒石の在の鹿の頭を多く彫りつけた大石を訪ね、真澄の写生画が狩猟民俗の精神とどう関わるかを考えています。宗教民俗学者の堀一郎は、柳田国男の娘三千のお婿さんでもあり、「民俗学の歴史的先駆者」と呼び、柳田が砧人会の小さな集まりで、「全くノートなしで、あの変化にとんだ遍歴、その著作のあとを、年月までそらんじて逐一紹介された」ことを回想します。柳田の中には、真澄の人生が年表のように入っていたはずですが、終戦直後の様子を伝えています。それは内田武志が真澄研究を始める時期に当たっています。真澄が

いたころは、グリム兄弟をはじめとする「ヨーロッパ民俗学の発端をなした時期よりも早く」という指摘もしています。国文学者の益田勝実「人民の友」と呼び、「真澄その人を民俗として見る、対象化しうるような学問をもたねば、わたしはだめなのではないか。そう思うことが多い」と述べます。

全集の「主な内容」には、まず「菅江真澄の画像」があつて、「日記編」「地誌編」「随筆・雑纂編」の書目を挙げますが、全十一巻の配分は示されていません。驚いたのは「柳田国男先生の言葉」が載っていることです。末尾には「昭和二十九年二月十八日付、内田ハチさん宛手紙より」とあります。珍しい文章ですので、校訂して引いてみます。

（前略）秋田県の若い有識者らが菅江真澄の遺稿を愛読するのと同じやうな熱意を以て、もしも他の多くの都府県の人たちが自分々々の昔の生活に注意しようとしたならば、其結果は多分一度は少なくとも日本の文化は興隆し、もう少し多数の同胞の前途が明るくなるでせう。

真澄は外から来た人です。時には同情のあまり親切なる早合点をして居ることもあり、小さい誤りも稀にはありませうが、ともかくも、前後数百年にわたつて是だけ細密な庶民生活の観察をした人はありませんでした。

秋田津軽南部にかけてはたつた一つ斯んな稀有な記録が保存せられてゐました。他の地方にも果して之にやや近い文章が伝はつてゐるだらうかどうか、それもおぼつかなく、第一真澄翁の日記のやうに、四十何年もの永きにわたり、一貫して農村の現実を語らうとしたものは多分他にはあるまいと思ひます。

前には深沢多市翁の辛苦なる蒐集校訂にも多くの東北人は共鳴しました。今度の内田武志君の事業は言はばそれに印象づけられた者の回想であり、認識であり、追慕であり、同時に變はりはてた其後の国情に対する今一回の反省でもあります。

さういふことの容易に出来る地域というのは自分の知る限り決してさう広くはないといふことを、或は東北には未だ心づかぬ人があるかも知れませぬ。

このうち、「永きにわたり」以下が写真版でも載つていて、末尾に「昭和二十九年二月十八日 柳田国男誌」と見えます。これは昭和二十九年二月の文章ですから、内田の『菅江真澄未刊文献集 一』が昭和二十八年十二月に出て、そのあと昭和二十九年十月に『菅江真澄未刊文献集 二』が出る間に書かれたことがわかります。つまり、この文章の「今度の内田武志君の事業」は『未刊文献集 一』を指すことになります。

柳田は、内田が深沢多市の『秋田叢書別集 菅江真澄集』の遺志を受け継いで、その補遺の性格を持つ『未刊文献集 一』をまとめたことを見抜いていたのです。『秋田叢書別集』と『未刊文献集 一』の間には敗戦があつたので、「變はりはてた其後の国情に対する今一回の反省でもあります」と加えます。やや飛躍した感じですけど、柳田は日本の状況に対する反省を迫るのがこの『未刊文献集 一』の意義だと考えたにちがいありません。そして、「さういふことの容易に出来る地域というのは自分の知る限り決してさう広くはない」と鼓舞するのです。

これには「内田ハチさん宛手紙より」とありますけれども、私は手紙ではないと思います。手紙にしてはやかしくまとめた文章ですし、最後に「柳田国男誌」と書いています。手紙には「誌」という字は書きません。単なる手紙ではなくて、序文を念頭において書いたのではないかと思ひます。時期からすれば、『未刊文献集 一』に入つてもいいような文章として書いているように考えられます。しかし、渋沢敬三の常民文化研究所の刊行物であることもあつたでしょうし、『未刊文献集 二』のときにはひどく体調が悪かつたと述べていますので、内田はこれを入れられなかつたのでしょう。宙に浮いたままだつた柳田国男の序文が、『菅江真澄全集』の発

刊にあたつて、言わば推薦文に準ずるような文章として内容見本に入れられたのだと見ることができそうです。なお、この内容見本には「菅江真澄略年譜」が入っています。

昭和四十七年七月、「菅江真澄全集」の案内が『菅江真澄研究所報告』4に写真入りで載っています。既刊紹介は第三巻までですが、日記編は四巻で一卷減っています。しかし、地誌編は四巻で一卷増え、随筆編が二巻、雑纂編一卷です。この時は全十一巻ですが、別巻は一卷増え、別巻一は「評伝資料（1）」、別巻二は「同（2）」「索引」となります。「評伝資料」という言い方も微妙で、「研究」ではありません。先の「真澄評伝」が「評伝資料」となつて、真澄の伝記に関する資料を集成しようとしたのかと思います。やがて「研究」に変わっていきますが、作り方は異なりますし、ここでは「年表」が削除されたのも気になります。

実は内容見本はもう一度作られています。これは、表紙には「全十二巻」とありますが、「各巻の内容」はなお全十一巻のままで、微妙に異なります。まだ昭和五十四年七月の第八巻が配本されていませんので、その前に作られたことがわかります。注意されるのは、別巻一がすでに出ていて、「菅江真澄研究」になっています。別巻二は「索引」ではなく、「総索引」と呼んでいます。「総索引」と言えば、本当はすべて

の語が入ってなければいけないのですが、『定本柳田国男集』（筑摩書房）も、「総索引」を名乗りながら、実は総索引ではないので、実際にはよくあることなのだと思います。

昭和五十五年十二月、第十一巻・雑纂1の配本に入つた『菅江真澄全集月報』の12に触れましょう。ちょうど内田武志が亡くなつた月ですが、そのことは間に合わず、「お知らせ」として、『菅江真澄全集』は全十一巻、別巻二の予定で進めてまいりましたが、刊行途次に発見された自筆本その他の諸資料も収載しましたため、巻数を増やし、全十二巻、別巻二とすることになりました」とします。ここで、作り直された内容見本の表紙にあつた「全十二巻」の内実が明らかになり、雑纂2が増えることが宣言されたことになります。

七 『菅江真澄全集 別巻一』の投げかける問題

内田武志が晩年に残した問題作ということで言えば、やはり『菅江真澄全集 別巻一』の「菅江真澄研究」を取り上げなければなりません。この研究は、だいたい真澄の人生を追うようにして、次のように構成しています。

はじめに

第一章 白太夫の子孫

第二章 故郷 一岡崎 二豊橋

第三章 尾張・修業

第四章 白井秀超

第五章 和歌秘伝書

第六章 蝦夷錦 一 松風夷談 二 蝦夷錦

第七章 加藤肩吾

第八章 津軽・採集 一 御国日記 二 津軽における真澄の日記

第九章 帰郷 一 《白白之図》 二 《真隅雜抄》 三 帰郷による学習

第一〇章 秋田風俗問状答 一 諸国風俗問状と石原正明

二 秋田への情熱と真澄の協力 三 那珂通博の跋文

四 秋田風俗問状答 五 秋田風俗問状答の復刻 六 秋田風土記

第十一章 如是観

第十二章 岡見順平と郡邑記

第十三章 真澄遊覧記

第十四章 真澄の肖像画

第十五章 墓碑建立 一 真澄の死去 二 墓碑建立

第十六章 鳥屋長秋

第十七章 高階貞房

おわりに

この「はじめに」は、『菅江真澄全集』の編者として、真澄の著述の解題の責任を持った私は、その仕事のさなかに、真澄の漂泊の根源は何に由来するのか深く考えざるを得なかった。そしてなおまた、真澄みずからがその素性に疑念を持って「人間とは何か」を問題として、その生涯を苦悩し、追究した人であることに思い知らずにはおられなくなつた。この観点において真澄の本質をまづみようとした」と始めます。この研究は「真澄の本質」を追究したことになります。以下、第一章から第十七章までの要約を記していますので、研究の全体像を考えるのに役に立ちます。

この研究はいくつかの視点を提案していますが、二つほど大きな問題があります。まず問題にしなければならないのは、第一章の「白太夫の子孫」でしょう。『伊頭園茶話』の「菅公家臣白太夫之末孫」であるという聞き書きをもとに、真澄自身は「上祖白井太夫より七代、孫」であるとしています。そうした点から真澄の素性を考えていきます。この白太夫というのは、「神の力を人間に持ち伝えた巫祝の家の始祖であつた」としています。そういう宗教家の家なので、真澄の家は多くの他国の人を泊めていたと考えます。そして、幼い時に岡崎にある曹洞宗の成就院に預けられ、喝食稚児として絵解きをしていたのではないかと思います。だんだんと想像が膨

らんでいくことが懸念されますが、そうしたことが彼の人生や作品に大きな影響を与えたのではないかと考えます。この「菅江真澄研究」では、「白太夫の子孫」という、それまでなかった視点が冒頭から浮上してくるのです。

もう一つの問題は、第九章の「帰郷」です。『百白之図』の詳細な内容から、文化五年、一八〇九年に亡くなった植田義方を弔い、教養を深めようとして、故郷三河に一度帰ったのではないかと推測します。このあたりになると、もう小説みたいになりますが、行きは廻国船を新潟で下りて、信濃から三河へ戻り、帰りは若狭小浜から船に乗って戻ったとまで述べています。『百白之図』には東海道や近畿地域の白の絵を多く描いていますが、真澄の絵は北海道の加藤肩吾の影響を受けて、格段に進歩したと考えられています。『百白之図』であれだけの写生ができたのは、回想ではなく、「東海道近畿地域の白の画は、この帰郷の折りに描いた写生だったのだ」と考えています。国学者の内山真龍と会ったことで、日記から地誌へ動いたのではないかということも述べています。

そして、「おわりに」では、『菅江真澄全集』刊行中の昭和五十年、柳田国男賞の榮譽に浴したことを述べます。これが大きな刺激になって、別巻一の「菅江真澄研究」を先にまと

めることにしたのでしょう。「白太夫の子孫」という問題についても、鳥屋長秋が円満寺御取次で出した書簡との関係に言及します。これは三回忌の墓碑建立の寄付に対して遺品の地誌を贈るものでしたが、それは円満寺そのものではなく、白山姫神社の熊谷越前頭にあてた書簡だったのではないかと推測しています。白山信仰の白山姫神社を祀るこの地域の人々に、その縁から白太夫の子孫である真澄の遺品を分けたと考えるのです。別に、「下層民衆に視点を置いて批判をまじえずに、あるがままの事物を記録しようとした真澄の意図は、その生まれ育った素性、環境を度外視しては語れない」とまで述べています。

実は、『菅江真澄全集』には「年表」がありません。ただし、昭和五十三年に発行された菅江真澄百五十年祭実行委員会編の『菅江真澄と秋田』（加賀谷書店）が残っています。その最後に内田の「菅江真澄年譜」が出ています。それは「別巻一 菅江真澄研究」は、この年譜の裏付けとなる」とするものです。例えば、真澄の生まれ故郷はそれまで渥美郡（豊橋）だと考えられていましたが、ここへ来て岡崎に変えています。これは水谷源二郎の教示によるものです。先に述べた帰郷は、文化五年四月に、「能代から乗船し、故郷・三河尾張へ帰郷して、年末までに戻ってきた」とあります。文化九年一月に

は、「諸国風俗問状」答書のため、秋田の正月行事を探索す」、文化十二年七月の藩主佐竹義和が亡くなったときに、「家老梅津下屋敷に滞在中の真澄は藩主死去の報に驚き、卒倒し重体となる。年末までに回復し、町家に移る」、文政五年には、「是観に託して東本願寺に『氷魚の村君』を奉納す」というようなことも出てきます。別巻一の「菅江真澄研究」の成果が、この年譜の中にさまざまに反映していることがわかります。従って、これが内田武志が最後にたどりついた年譜だったことになります。

しかし、微妙なのは「白太夫の子孫」はこの年譜では外しであり、先ほど言いましたような、安永九年の伊吹山の採薬旅行も外してあります。「天明三年、故郷を出立する以前の年譜はあえて削除した。いまだ推測、研究の段階だからである」と述べています。別巻一の「菅江真澄研究」の成果はだいたいそのままこの年譜に反映しているのですが、若いときの事柄は研究途上であるとして載せません。内田の中に微妙な揺らぎがあったことが察せられますが、これは注意していることでしょう。

もう時間になりましたので、終らなければいけません。最後に『菅江真澄全集月報』十三冊に掲載された文章を並べておきました。先ほどまで聞いてくださっていた新野直吉名誉

館長が、4に「菅江真澄について私は知らなすぎる」という文章を書かれています。その思いが持続して、やがてこの秋田県立博物館長になり、さらに名誉館長になって、ご講話を続けられていることがわかります。先ほど久しぶりに一時間ほど親しくお話しましたら、「私は知らなすぎる」と書いた責任があり、今は少しはわかるようになったことを、秋田県の方々に表明したい」とおっしゃっていました。そんな思いでご講話を続けていらっしやるのだと思います。月報には四十九編の文章が載っていますが、内田武志が三回書いていますので、四十七人になりますが、内容見本と重なるのは竹内利美・瀬川清子・千葉徳爾の三人です。大家の文章というより、後に活躍される人々が菅江真澄に寄せた文章が多いように思います。

内田武志が亡くなった後、妹のハチさんがさまざまな形でそれを受け継いで、昭和六十四年には『菅江真澄民俗図絵』全三巻（岩崎書店）をまとめますし、ご自分でも理科や科学の視点から真澄の読み方を提案しています。私は真澄を開いていく上でも大事な読み方だと思っています。

もう四回続いたお話を終わりにしましょう。昭和三年の百年祭のときに柳田国男が秋田で講演をして、この百年祭が第一回の真澄ブームになったと思います。そして、今日見た

ように、昭和四十三年の百四十年忌からは一年遅れましたが、昭和四十四年の墓前祭は『菅江真澄遊覧記』の刊行中であり、昭和五十三年の百五十年祭は『菅江真澄全集』の刊行中でした。この『遊覧記』と『全集』が出て、百四十一年祭と百五十年祭は第二回の真澄ブームを作ったと言っているでしょう。それはまさに内田武志の偉業が成し遂げられた時期であり、一般の人々が現代語訳にした『遊覧記』を通して真澄の魅力を知り、さらに原文と挿画をすべて収録した『全集』によって全体像を知ることになりました。

最後のご提案は、第三回の真澄ブームを、私たちの時代につくらなければいけないということになります。二年後の平成三十年が百九十年祭、そして、いま生前退位の意向がありますから、平成はそこまで続かないのかもしれないかもしれませんが、平成四十年が二百年祭ということになります。百九十年祭から二百年祭にかけてのこの時期に、私は第三回の真澄ブームをつくっていききたいと思います。そのためには、国際化や情報化の時代を迎えていますから、その中に菅江真澄を置いて、その魅力をどう発信できるかが大きな課題になると思います。でも、内田武志をこうして四回たどってきたことで、私たちは百九十年祭、二百年祭に向けた歩みを始められるのではないかと思います。

ご清聴ありがとうございました。

※平成二十八年九月二十四日、当館講堂にて講演。

付記 最初に作られた内容見本については、小田富英さんから御教示を得ました。また、鹿角に住む須藤（豊口）春代さんを松山修さんと訪ねましたが、その後、お亡くなりになりました。ご冥福をお祈り申し上げます。なお、平成二十九年一月二十八日に、秋田テレビで「秋田人物伝 内田武志」が放映されました。

菅江真澄と北国の椿伝説

NPO法人あきた地域資源ネットワーク、文筆業 永井 登志樹

はじめに

ただいま副館長さんから過分なご紹介をしていただきました永井と申します。これから菅江真澄が描いた絵と関連写真をスライドでお見せしながら話をすすめてまいりたいと思います。

初めにこの絵をご覧ください（図1）。今の男鹿市の椿という漁村の風景を描いた絵です。真澄はここにおよそ二百年前、『男鹿の秋風』の旅で訪れました。小さな湾の真ん中に突き出ている小高い岩山は全体がヤブツバキで覆われていて、地元では能登山と呼んでいます。集落の名前である「椿」もこの椿山に由来しているんですが、実はわたくしはここで生まれまして、中学二年生まで暮らしました。ですから、この椿山＝能登山の下を通って学校に通い、またわたくしの父がこの真ん前にある郵便局に勤めていましたので、子どものころから馴染み深く親しい場所でした。ただ、菅江真澄が描いたこの絵を知ったのは、子どものころではなくて、随分あとになってからです。

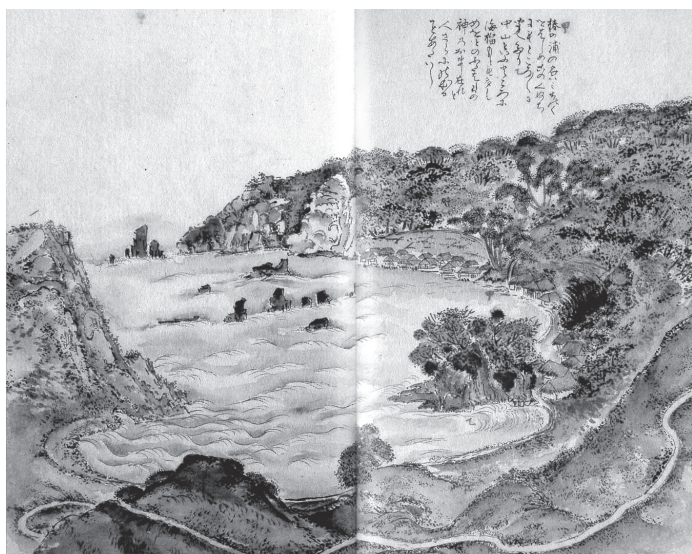


図1

能登山のヤブツバキ群落は、大正十一年（一九二二）に「ツバキ自生北限地帯」として秋田県で初めて国の天然記念物に指定されたんですが、そのこともあって、男鹿市はツバキを市の花にしています。昨年（平成二十七年）春、男鹿市で第二十五回全国椿サミットが開催されました。ツバキ、サザンカを市町村の花木にしている全国の自治体で構成する全国椿サミット協議会の主催で、ツバキ愛好家、日本ツバキ協会の会員、自治体関係者が一堂に集うツバキの祭典です。それに合わせて男鹿市菅江真澄研究会が会員を対象に椿をテーマにした講演会を催し、わたくしが話をさせていただきました。男鹿半島、そして男鹿とともにツバキ自生北限地帯として天然記念物に指定されている青森県の夏泊半島、この二つの地に伝わる椿伝説の関連を、菅江真澄の記述を通して探ってみるという内容でした。今日はその焼き直しといつていいものになるかと思います。

ただ、「菅江真澄と北国の椿伝説」というタイトルを付けてしまつてから気づいたことなんです。歴史学などでは一般的に「北国」と書けば、近畿地方、京都の北にあたる北陸地方を指す言葉になるので、ここにいらつしやるみなさんのように歴史にお詳しい方がたは、「ほっこく」と読むかと思っています。ですが、もちろん北陸地方の椿伝説について話をす

るわけではありません。最初は「菅江真澄と陸奥・出羽の椿伝説」にしようかと考えたのですけども、何となく納まりが悪くて、このようないささか問題のある安易なタイトルにしてしまいました。言い訳してみた話ですけども、「ほっこく」ではなく「きたぐに」と読んでいただくよう、お願いいたします。

一 ツバキについて

（一）日本のツバキ

本題に入る前に、植物としてのツバキについて簡単に述べておきたいと思います。お渡ししている資料をご覧ください。植物の分類としてのツバキ属の原産地は日本を含むアジア東南部で、およそ二百五十種が分布するといわれています。日本はツバキ属の分布圏の最東北端に位置し、自生する種の数はやブツバキ、サザンカ、ヒメサザンカの三種があります。ほかに一亜種としてユキツバキ、一変種としてヤクシマツバキ、これだけなんです。これらに由来する鑑賞用の園芸品種が世界中に頒布されています。江戸時代に多くの園芸品種が育成され、十八世紀にヨーロッパに渡つて大流行し、現在はヨーロッパやアメリカのカリフォルニアあたりで特に盛んで、その品種の数は二千から三千種に及ぶといわれています。

『古事記』では都婆岐、『日本書紀』には海石榴の字で表現されていて、「椿」の字は『万葉集』で初めて登場するようです。この字は本来は漢字ですが、春に花が咲くことから日本であてられたものといわれ、中国では梅檀科の「香椿（ちゃんちん）」という木を指すそうです。日本の「椿」は漢名では「山茶」と記すそうですから、ややこしいですね。

『万葉集』には椿を織り込んだ歌が長歌も入れて十一首ありますが、なかでも「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つ思はな巨勢の春野を」（巻一／五十四）は、光沢のあるツバキの葉が陽の光を浴びて連なり輝く情景が浮かんでくるような歌で、ご存知の方もいらっしゃるかと思います。

（二）秋田県のツバキ

わたくしたちの住む秋田県に自生するツバキ属はヤブツバキとユキツバキのみです。ヤブツバキの分布範囲は、学名がカメラリア・ヤポニカ（*Camellia japonica*）、日本のツバキといふことからわかるように、日本固有のものとされてきました。ですが、今は朝鮮半島南部と中国の沿海州、台湾にも繁茂しているといわれています。日本でツバキといえば、ほとんどの場合ヤブツバキのことで、今日の演題の椿もヤブツバキを指しています。



図2

木は直立して、高さは三〜四メートルの低いものから十八メートルほどの高いものまであり、木肌は灰色、つるつるしています。五弁の花は直径七センチほど、ちよつとすばまつた形をしていて、多数ある雄しべの花糸は白く、くつついて筒のようになっていきます（図2）。種子から椿油を採ります。ヤブツバキの一番の特徴は、光沢のある厚ぼつたい葉を持つ常緑の照葉樹だということかと思えます（図2）。照葉樹の葉の多くにはクチクラという表面を保護する透明な膜があり、ヤブツバキの葉はその典型で、日本の照葉樹林を代表する樹木といえます。それが秋田のようなあまり暖かくない地方で見られるというのが、とても重要なことですね。

秋田県では、このヤブツバキのほかにユキツバキが見られます。東北から北陸地方の日本海側、やや標高が高く雪の多い地域に生育しているツバキです。実はユキツバキの自生北限地も秋田県にあります。田沢湖のちよつと南の方、院内の柴倉峠というところにユキツバキが群落をつくっています。ヤブツバキと比べると花が開いて雄しべの花糸が黄色で短かく、見比べると違いがすぐにわかります。寒冷地に分布するもののヤブツバキより寒さには弱いのですが、それは冬の間は雪の下に埋もれて外気から守られているためです。カマクラと同じで雪の中は暖かいんですね。

(三) 男鹿半島と北東北のツバキ

昨年（平成二十七年）、「男鹿のツバキ見どころ30選」というツバキマップを作成するために、自生、植栽問わず男鹿市内のツバキの植生状況を調査したのですが、わたくしが確認しただけでも二十数か所のヤブツバキ自生地があり、まさに男鹿半島はツバキの半島であるという思いを強くしました。その中でも「ツバキ自生北限地帯」として国の天然記念物に指定されている「能登山の椿」は、男鹿のツバキのシンボルの存在といつていいでしょう。先ほども述べましたが、男鹿市がツバキを市の花にしたのも、全国椿サミットが開催

されたのも、能登山の存在があったからといえます。

これは下の方の文字が風化でわからなくなっていますが、「能登山の椿」の国の天然記念物指定を受けて建てられた標柱です（図3）。指定範囲は当初四百六十五平方メートルでしたが、その後の調査によって現在は能登山の隣接地一帯を含めて八千四百二十九平方メートルの広い範囲に及んでいます、生育株数は約五百九十株となっています（註1）。

この地図をご覧ください（図4）。北東北の主なヤブツバキの自生地ですが、青森、岩手、秋田の北東北三県で特多いのは秋田県の由利地方と岩手県の南三陸であることがわか



図3

ります。由利地方は対馬暖流の影響もあって暖かく、海岸に沿って普通にヤブツバキが見られます。男鹿半島は南岸にある能登山のほかに、あまり知られていないですが入道崎に近い北岸、北磯の海岸にも群落があります。それから八峰町の八森、青森県に入って深浦町の丸山、舳作岬というふうに沿岸部に点々と見られ、深浦町以北にあるのが唯一、陸奥湾に面した平内町夏泊半島の椿山です。



図 4

生物の北限は、一般的には緯度によって決まるとされていますが、暖かい温帯地域に生育する照葉樹のヤブツバキの分布には、日本海を北上する対馬暖流の影響が関与しているという説(註2)に従えば、石川県の能登半島、新潟県の佐渡、山形県の飛島、そして秋田県の由利地方、男鹿半島、津軽西海岸など暖流に洗われる日本海側の海岸地帯にヤブツバキが繁茂しているのも納得できます。ただ、ここで問題となるのは一か所だけ日本海側ではない夏泊半島の椿山です。

「ツバキ自生北限地帯」として男鹿半島と夏泊半島が二つ一緒に国の天然記念物に指定されているんですね。男鹿半島は北緯四十度、夏泊半島は男鹿より緯度が一度も高い四十一度線上にあり、距離も相当離れています。厳密な意味から言えば北限は夏泊半島椿山一か所でもいいはずなので、不思議です。よく言われるのは、日本海側を男鹿半島、太平洋側を夏泊半島にしたという説ですけども、夏泊半島は太平洋側ではありませんし、男鹿半島より北の日本海側にも群生地があるので、説得力に欠けます。

大正十一年、どのような経緯で定められたのかよくわかりませんが、推測すれば、北東北におけるヤブツバキ群落を代表する意味で繁茂の状態がよい模式地として二か所を選んだ、それが「自生北限地帯」という文言に表れているとも考

えられます。ただ、能登山の北にあるのに指定されていない北磯、丸山、舩作岬などのヤブツバキ群落の注目度がどうしても低くなりがちで、ちょっと腑に落ちない気がしないではありません。

ここまで植物としてのツバキ、主にヤブツバキについて大雑把に述べてきました。それでは次に菅江真澄が旅の途上で目にしたツバキの記録をひもときながら、今日の本題である夏泊半島と男鹿半島の椿伝説について話を進めてまいりたいと思います。

二 菅江真澄の記録した北国の椿

(一) 三崎山

菅江真澄は旅の途上でツバキの群落を目にとめ、それを詳しく日記に記しています。もう一度地図をご覧ください（33ページ、図4）。この地図の大きな●印が菅江真澄が記録しているヤブツバキの自生地です。南から三崎山（三崎峠）、男鹿半島能登山、八森椿海岸、舩作岬椿山、そして夏泊半島椿山。これらについて真澄がどのような記述をしているか、訪ねた年代順に三崎山から見ていきましょう。

ここは当時は庄内藩酒井氏の領地だったところで、後に羽前国と羽後国の国境、今は山形県と秋田県の県境となっています。

ます。三崎山は鳥海山の噴火によって流れ下った溶岩で形づくられた岩山で、この岩場を縫うように小道が通じています。街道一の難所といわれ、今でも旅人たちに踏みしめられ、表面がすり減ってテラテラになった敷石を見ることができま。菅江真澄がここを通ったのは三河を旅立つてからおおよそ一年半後の天明四年（一七八四）九月のことでした。その箇所をちよつと読んでみますので、お渡ししている資料をご覧ください。なお、資料に載せている本文は、すべて未来社の『菅江真澄全集』に拠っています。

トヤザキ
鳥崎のはま、滝の浦をあゆみて女鹿^{メカ}の関になりて、せきての札わたしぬ。椿のみ生ひしげりたる岩つらのみちにあしさし入て、やをらくだりて三崎阪に至る。慈覚大師の御堂は、もがさ、はしか、かるらかにまもらせ給ふとて、子のため、むまごのためとて人まうでたりけるが、此みまへにうづくまりぬ。この御堂のしたには、手ながにとられたる人のかばねあまたありしかど、いまは岩落かさなりて見えざりけりといふ。手ながはみずのじち（術）もありけるにや、海に入ては行かふ舟とゞめてける。世におそろしものなりけりと、かたり伝え侍る。

（『秋田のかりね』天明四年九月二十五日の項）

真澄は女鹿^めの関で関手形を渡し、「椿ばかりが生い茂る石畳の道に足を踏み入れて三崎峠に至ります。今も真澄が通つところと同じように、旧街道の道すじにヤブツバキが見られますが、三崎山にはヤブツバキと同じく照葉樹を代表する樹木であるタブノキの自然林が広がっていて、こちらのほうが植物地理学的には重要なようで、「吹浦三崎山のタブ林」として山形県の天然記念物となっています。

高くて幹が太いタブノキの下にヤブツバキが群落をつくっている森は、日中でも暗く、照葉樹の神霊を感じさせる独特の雰囲気があります。真澄はこの森の中にある慈覚大師（円仁）を祀る大師堂に詣でます。ここで手長という怪物がいて旅人を襲い、その屍がお堂の下に積まれていたという伝説を記していますが、「語り伝え侍る」としてあるので、この話は子どもの疱瘡やはしが軽くすむようにと祈るためお参りしていた地元の人から聞いたのでしょうか。

（二）夏泊半島椿山

次は夏泊半島の椿山に行きましょう。三崎山は菅江真澄が初めて秋田に入った天明四年に一度きり通っただけですが、夏泊半島のある今の平内町は通過も含めて幾度か足跡を残しています。天明五年（一七八五）、真澄は蝦夷地に渡るのを

あきらめていったん津軽から南部領を経て伊達領へと南下し、しばらく一関のあたりで過ごした後、天明八年（一七八八）夏に再び蝦夷地を目指して北上するわけですね。その時の日記が『外が浜づたひ』ですが、それには夏泊半島の椿山について言及した次のような箇所があります。

この流江あなたより浦々のやかたつゞきて、田沢とかいへるに椿山ふたつまで磯輪に在りて、うづき八日の頃はひし／＼と花咲き、そのまさかりは波も紅に寄せ返り、あさ日、ゆふ日の、海にかゞよふかりのみち／＼て、巨瀬の春野はいざしらず、世にたぐふかたなきよしをいへり。そこに神の在して椿明神と申と、こは五瀬（伊勢）の国にもおなじみな聞えたり。潮立テ川の橋にたちてしばしは見渡し、小湊に来る。なべての名を比良奈以（平内）とよべり。

（『外が浜づたひ』天明八年七月六日の項）

真澄は南部と津軽の藩境、狩場沢の関所を越えて、夏泊半島の付け根にあたる小湊にやって来るのですが、この時は目的地である蝦夷地へ急ぐ旅だったこともあって椿山には行きませんでした。行かなかったけれども、田沢というところの浜辺に世に類のないほど美しい椿が咲く椿山があるといっ

て、大和、今の奈良県の椿の名所である巨勢の春野を引き合
いに出して、とても強い関心を示しているんですね。

巨勢の春野は先ほど述べた『万葉集』の「巨勢山のつらつ
ら椿つらつらに見つつ思はな巨勢の春野を」を念頭に置いて
いるのがすぐわかると思います。続けて田沢の椿山には椿明
神が祀られていて、同じ名の社が伊勢の国にもあるとも記し
ているのですが、真澄は伊勢の国、今の三重県鈴鹿市にある
椿大神社（つばきおおかみよし）にも行ったことがあった
のでしょうか。

この『外が浜づたひ』の旅からおよそ六年半後の寛政七年
（一七九五）春、真澄は南部領の下北半島から再び津軽領へ
入るのですが、この時、見たいという思いがずっと持続して
いたのか、長年の念願を果たすかのように、真つ先に椿山に
向かうんですね。その部分をちよつと長くなるんですが読ん
でみます。

やよひ廿二日 津茹の嶋山、椿崎とておかしきところのあ
りとかねて聞きしかば、今や咲ぬらんとて見に出たつ。知
加（近）川を涉り、馬門の関に、れいのせき（関）手出し
て、やおら越ゆ。（中略）

廿六日 海もなぎ空もはれたれば、つとめて椿崎見にとて

出ゆく。浦館^{ヤカサ}よりはみちしばし離れて岨よりくだれば、波
うつ岸べよりけしき遠ざかりたるいそ山に、としふる椿の
ひしひしと生ひ茂りたり。こは如月の頃雪やゝけぬる頃ゆ、
やをら咲初てけると云ふ。今、やよひの末つ方花はなから
ばかりも咲つれど、紅ふかうふゝみたるは稀なるやうに、
朝日の影にいとまばゆきまで、にほひの潮と共に満々たり。
年毎の卯月八日の頃ほひは、いつもまさかりとて、近きわ
たりの人々うちかたらひ、かちよりし、舟にてこゝに渡り
花見すと云ふ。けふの空、のどかにうち霞みたる朝汗に、
こゝらの椿咲たるは、巨瀬の春野のたま椿も、えこそをよ
ばねと、こなたかなた、ちりたる花とり吸遊ぶ童を友にわ
けめぐりわけ入て、小川の流るゝへたに椿明神と云ふ祠あ
るにぬかづく。ころは文治（一一八五―九一）のはじめやら
ん、此浦にかほよき女ありけるが、こと国の船人年々来て、
此うらうらの宮木伐てつみ行男と契り、末はいもせのかた
らひせまくむつびたり。其舟人の帰りゆかん折に女の云、
都人はつねに椿の油てふものもてぬりて、髪の色きよらに
つやつやとひかり、つらつら椿の葉のごとにありとこそき
け。かゝる賤しき海士少女も、をぐしとるいとま、露ぬり
て、にやはしきものならば、来る年のつとに椿の実たうび
てよ。絞りぬりてんと、余波すべなうない別て、とし明れ

ば此船長のこんやと、むつきより、しはすまでまつに、むなしく船の来ざりければ、又のとしも春より一とせを待つに、いかゞしたりけん二とせ斗船長のこぬを、この男は、こめ（異女）に心ひかれてやと、契のたがひしを深く恨て海に入て身まかれり。その女のなきがら波に寄たるを、浦人ら、なくなく横嶺といふ所に埋て、つかじるしに木を植てあととぶらひけるをりしも、かの船をさ三とせを経てこゝにこぎつきて、さがたき事にたづさはりて、二とせ三とせも沖のりせざりける。こたびは、きつる、かの女は事なしやと問ふ。浦人しかじかとこたふるを聞て、ふなをさ、こはまことか、いかゞせんとてふしまろび、血の涙を流してなけどいふかひなう、せめて其塚にまうでんとてよこみねに行登りて、莓（苔）の上になかきしあてて、いける人にもものいふやうに悔の八千たびものいひつつ、其つゝみ来る、いくばくの椿の実どもを女のつかのめぐりにまきて、今は苔の下に朽ぬる黒髪、いかに此油ぬるともつやゝかならんやと、たゞなきにないて舟こぎいにき。その椿残りなう生ひ出て林となり、花ことにおもしろく咲たるを人折れば、きよげなる女あらはれて、花な折そと惜しみしかば、海士、山賤おそれをなして、女のなきたまを神にいはひけるとなん。其かん祠も今は横嶺より、かく、こと所

にうつしたりけり。咲たる林のうちにながめて〔天註〕椿崎の図あり、

影おつる磯山椿紅に染めて汐瀬の波の色こき

（『津軽の奥』寛政七年三月二十六日の項）

この日記のタイトルの『津軽の奥』というのは、真澄が付けたものではありません。津軽での真澄の著作は、完全な形で残っているのは少ないのですが、これも草稿のまま残されていた四編の日記を後の人が『津軽の奥』のタイトルでひとつにまとめたもので、真澄が椿崎と記している椿山の部分は第一部にあたります。『菅江真澄全集』に掲載されているのはその写本から採ったもので、現在は原本、写本ともその所在はわからなくなっているようです（註3）。

全集には図絵が載っていないんですけども、椿山の記述のなかに「椿崎の図あり」という注記があるので、もともとは図絵があつたものと思われます（註4）。ほとんどが津軽で描いたと思われる図絵などを集めた『錦木』という雑葉集があります。これも真澄ではなく後の人が仮の題を付けて一冊にまとめたものですが、それにこの記述部分に関連すると思われる図絵が二枚含まれています。

これはそのうちの一枚で、椿山が二つ並んでその間を川が

流れて橋が架かり、鳥居と松も描かれています（図5）。彩色もほとんどされていない墨書きの粗末なスケッチ、下絵と呼べるようなものなのですが、その中に「椿崎、花ナシ、松海」などの文字が書きこまれているので、現地でこのように簡略して描き、後にこれをもとに滞在先などで彩色図絵として仕上げたのでしょう。日記における描画の過程が推測でき、真澄がすぐれた記憶力の持ち主だったことを裏付けるものとして、珍しく貴重な絵だと思えます。とても簡略化されていますが、現在の椿山もほぼこのような位置関係になっているので、真澄の写生の眼は確かながわかります。



図5

ここで真澄は再び「巨勢の春野」を引き合いに出して椿山の美しさをほめたたえ、椿明神に詣でるのですが、次にかの紙数を割いて、この椿山と椿明神にまつわる伝説を詳しく書き留めています。それは異国の船乗りと土地の娘との、椿明神の縁起にかかわる悲恋の物語でした。―船乗りと土地の娘が恋に落ち、契りを交わした。娘は都人が髪につけるという椿油を男にねだり再会の約束をしたが、待ち焦がれても男の船はやって来ず、心変わりを疑った娘は悲嘆にくれて海に身を投げた。村人たちは悲しんでその亡がらを埋め塚とした。やがてやって来た男は娘の死を知り、嘆き悲しんで持ってきた椿の実を娘の塚のまわりに撒いた。それが生い茂って椿の森になり、そこに娘の亡き霊を神として祀るようになった―という話です。

この椿伝説を真澄は後々までも執着といえますか、心に留めていたようで、夏泊半島を旅した二十八年ほど後の文政六年（一八二三）ころ、久保田、今の秋田市にいた時に書いたとされる『筆のまにまに』の「錦木」の項に、ほとんど同じ内容でこの伝説を載せています。お手元の資料をご覧ください。

おのれかきし《津刈の遠》と云える日記あり。其日記に平

内の小湊の浜辺に出て椿山たづね見しに、まこと海榴のみいとく多く、こと木は見えず生い茂りたる磯山ニつまでならびてあり。そこに椿明神といふ神の社あり。椿明神は伊勢国にませりこそ、そも伊勢よりむかしうつしまつる御神にやと、浦人に問えば、いらへて、いな此神は女神也。むかし此浦にみめことがら世に勝れたる女あり。吉備国の船人と契りて女の云ふやう、こと国に椿実多く椿子の油を女は髪にぬりて色よくつややかにつらく椿の色沢なすよし、人のものがたりに聞きさふらへど此国には椿まれなり。此椿の油もておのが髪にぬらまくおもへどせんすべなし。こたび吉備に販り給ひしならば、来む春は椿の実をつとにもておはしてわらはに給はれ。かならずわすれ給ふな、よしその油の木の子はとまれかくまれ、来む春までの別れせちに命しぬべうかなしとまかなしとて、男の袖にすがりてよ々となく。(後略)

『筆のまにまに』 文政六年ころ久保田で執筆
船乗りが今の兵庫県、吉備の国の人であること、娘が海に身を投じたのではなく病氣になって亡くなったこと、恋する女の情念のようなものが強く感じられることなど、ところどころに違いはありますが、物語の筋は『津軽の奥』に書いて

あるものほとんど同じなんです。これを津軽から遠く離れた久保田で何年も経ってから再録したというのは、真澄はこの物語に何かしら心を動かされるものがあつたからでしょう。また、「おのれかきし《津刈の遠》と云える日記」で椿山を訪ねたとあるのは、真澄の記憶違いでなければ、夏泊半島を旅した時の日記は『津軽の遠』が本来のタイトルであつたことをうかがわせます。

椿山は山といつてもなだらかな丘陵で、すぐ前の陸奥湾に面した磯浜には、真澄が詠んだ「影おつる磯山椿紅に染めて汐瀬の波の色こき」の歌碑があり、このようなツバキ自生北限地帯を示す案内板が建っています(図6)。



図6



図 7

ヤブツバキの森の中に入ると散策路があつて、根周り一メートル以上の大木も多く見られます（図7）。天然記念物の指定範囲全体でおよそ一万二千本にも及ぶといえますから（註5）、本数、規模、生育状況、いずれをとつても最北のヤブツバキ自生地の名に恥じません。

椿神社は椿山を背後に建っています（図8）。神社の沿革を記した案内板によれば、「文治（一一八五年頃）の初め椿山にまつわる伝説の祠があつた。天正年間（一五七三～九一）には椿崎大明神と称した。明暦（二六五五～五七）年中より椿大明神を祀る。創立は元禄十一年（一六九八）四月



図 8

三日椿宮女人を神霊として建立した。安永二年（一七七三）椿神社と改称し、明治六年（一八七三）村社と列せられ、猿田彦大神を祀る」とあります。

こうした神社の縁起は必ずしも史実に沿ったものでない場合が多いため、そのまま信ずるわけにはいきませんが、現在の祭神は猿田彦大神となっているのが不思議です。真澄が記しているように初めは伝説の女人を祀った椿明神であったのが、後に猿田彦大神を祀る神社の総本社である伊勢の椿大神社から勧請し、椿神社と称するようになったのでしょうか。また、これには特記事項として「横峰嘉平と玉女の悲恋物語の伝説がある」とあり、伝説を紹介した案内板も境内に掲げられています。内容は真澄が記したものとほとんど同じですが、娘の相手が船乗りではなく、越前の商人となっています。椿山のあるのは夏泊半島の先端近くの東田沢というところですが、ここはかつて交通不便な陸の孤島といわれていました。ですが、こうした呼び名が付いたのは近代になって陸上交通が発達してからのことで、北前船が定期的に廻船し、海上交通が盛んだった江戸時代にはヒバ材の積み出し港として大変栄えました。ですから、西の国、南の国からやって来た船乗り、商人らとの交流がこの地で古くからあったことが、椿伝説が生まれた背景にあるようにも思えます。

（三）舩作岬椿山

続いて舩作岬の椿山に話を移します。舩作岬は青森県の日本海側、深浦町にあります。このツバキの群生地を真澄が訪れたのは、夏泊半島の椿山を見た翌年の寛政八年（一七九六）夏でした。その部分を読んでみましょう。

海榴崎や見なん、おかしき秋のうら山のところどころも見まほしければ、つとめてこのいそやかたを出なんと、かねてものししかど、よんべ、ゆくりなう風あらくたちて、木々の梢は余波なう吹折れ、家どももふきたふえぬべう風のさはぎに、夜ひと夜いもねず、あさあしつれば、けふはとどまりて、あくるふん月（寛政八年七月）の十日あまり六日、岡辺なる竹腰という間丸里圭のもとを出て港辺に至り、そがゆかりなりける小浜なにがしの屋にしばしかたらひて、行末のあないなど、ねもごろにかつ聞えて、草枕かりねん宿もまよはじとてこゝをいづ。（中略）

かくて、椿崎とも海榴山ともいふいそ山のこゝにありけり。あら磯の波は、高いはの末の苔のたもとまでかかりて、見下すだに、あやうきこゝちぞせりける。ちいさき鳥居に入れば、部都玖黎（へつくれ）明神とて、澳玉命をぞあがめ

まつり奉る。いにしへこゝに、ことさへぐからくにより舶
 のはなたれ来りて、やりたるそのふねの鱸を造りなして、
 こぎいにき。そのころは海榴いと多く、岩のはさまごとに
 生て、さかりなるころは、朝な夕日のまばゆきまで波にて
 り、みちくる潮も紅にそめしかど、近き世のことにやあり
 けん、いでは（出羽）の国恩荷（男鹿）の島山よりこゝら
 の鹿の海渉来て、はみもの乏しき冬のころほより春かけ
 て、雪のなかくひあさりもて余波なう見えしかど、近き
 としとなりては、実ばえ、ひこばえのみぞ多かる。しかは
 あれども、ふりたる梢もところぐにまじりたり。

いそ山に春は咲てふたま椿かかるやなみの光なるらん

（『外浜奇勝』寛政七年七月十六日の項）

真澄が深浦で身を寄せていたのは竹腰（越）里圭の若狭屋、
 小浜屋などの船問屋でした。これらの人びとに送られ、「海
 榴崎や見なん」といって、旅の目的地が椿山であることが明
 確な、印象的な書き出しで日記は始まっています。ここでは
 「海榴」をつばきと読ませていますが、初めにお話した日
 本書紀の「海石榴」の表記がもとになっているのでしょう。

日記のタイトルは『外浜奇勝』となっていますが、これも
 『津軽の奥』と同じように、真澄が付けたものではありません。

草稿のまま残されていた三篇の日記を後の人が綴り合わせて
 仮の題としたもので、舳作岬を訪れた部分は、その第二部に
 あたります。原本は青森市の個人の方が所蔵していましたが、
 現在は青森県立郷土館に寄贈され、県の重宝に指定されてい
 ます。青森県には真澄の自筆本がほとんど残されていないの
 で、これは希少であり貴重です。

これが菅江真澄が描いた椿山―海に突き出た岬のようにな
 っているのが椿崎ともいいますが―の絵で（図9）、こち
 らがほぼ同じアングルから撮った現在の風景です（図10）。



図9



図 10

これは椿山を東側から見たもので、真澄の歌碑、「いそ山に春は咲てふたま椿かかるやなみの光なるらん」が建っています（図11）。歌の文字は『外浜奇勝』の真澄の自筆から採っているんですが、もうひとつ注目したいのは、この碑には菅江真澄ではなく、「英二」と刻んであることです。津軽を旅していたころは白井秀雄、時には本名とされる白井英二を名乗っていたと思われます。そのことをご存じない方は、英二って誰だろう？と疑問に思うかもしれませんが、菅江真澄を名乗るようになったのはずっと後になってからなので、理に適っていますね。



図 11

わたくしが初めてここを訪れたのは、今から四十数年前、一九七〇年代の初めころでした。今は町の観光、温泉施設なんかができて見違えるようになりましたけども、そのころは椿山に至る道がちゃんといっていないくて、藪漕ぎした思い出があります。その後も何度か行っていますが、数年前から椿山には「文化財保護のため関係者以外の立入を禁止しています」という看板が立ち、チェーンが張られるようになりました。それで深浦町の教育委員会に問合せましたら、調査のためならということで許可をいただいて、今年（平成二十八年）の春にしばらくぶりに行ってきました。

歌碑のある場所から岩浜にいったん下り急な斜面を登っていくと、深浦町指定天然記念物の標柱が建っていて、その奥にお社があります。真澄はこれを澳玉命おきつたまのみことを祀る「へつくれ明神」としています。わたくしの調べた範囲ではこれが何の神なのかよくわかりませんが、真澄が記しているこの岬の名のいわれからもわかるように、舳作岬の沖合は潮の流れが速く、航行する船が漂流難破する難所でした。また、椿山は古くから航海上のよい道標みちしるべとなった神聖な場所だったことから、海上交通を守護する神かとも考えられます。

ヤブツバキはほとんどが高さ三〜四メートルで、幹も細く、多くは南側の崖にへばりつくように群生しています（図12）。



図 12

北側はイタヤカエデの林になっていて、ヤブツバキは見られません。おおざっぱな目視では全体で百五十〜二百本ほどでしょうか。面白いのは、男鹿半島から海を泳いで鹿が渡ってきて、えさの乏しい冬から春にかけて椿を食いあさってしまった、と真澄が書いていることです。わたくしが一九八〇年代の中ごろ、三十年ほど前にここに行った時、南の海上に男鹿半島が見えたんです。直線距離にして七十キロくらいでしょうか。対馬暖流に乗って鹿が泳いで渡ってこれない距離ではありません。

実際、江戸時代には男鹿半島で鹿が増えすぎて農作物が被害にあい、その駆除のため元禄十五年（一七〇三）から天明三年（一七八三）にかけて何度か鹿狩りが行われ、最大で九二二〇頭もの処理頭数があったことが記録に残っています（註6）。男鹿半島の端にある入道崎には鹿を追いついで海に落としたことから「鹿落とし」と名付けられた断崖があり、実施した年代的にも真澄の記述と符合します。

鹿の食害のほか、山火事でツバキが枯死したことなどがあり、冬の季節風にさらされる過酷な環境もあつてヤブツバキの生育状態は必ずしもよいとはいえませんが、これより北の青森県の日本海側で、これだけまとまった群落をなしているところはほかにありません。歴史、信仰、植物地理、いずれに照らしてみても、男鹿半島の能登山に劣らない価値ある場所かと思えます。

（四）八森椿海岸

次は今の八峰町、八森の椿海岸です。菅江真澄はここをわかっているだけで四回通っています。一回目は天明五年（一七八五）で、この時は秋田・津軽の国境から日記『外が浜風』が始まり、八峰町の記述部分は残っていません。二回目は享和元年（一八〇一）、津軽から再び秋田に入った時で、

その時の日記が『雪の道奥雪の出羽路』です。三回目は文化三年（一八〇六）の『浦の笛滝』。四回目が文化四年（一八〇七）の『おがらの滝』の旅になります。

これは椿の浦、今の椿漁港を描いた『雪の道奥雪の出羽路』の絵です（次ページ、図13）。ここでもこれまで訪ねてきた平内の田沢、深浦の舳作岬、三崎山、男鹿の椿の浦をあげています。ただ、訪れたのが真冬の季節だったこともありませんが、図絵にはツバキの木らしきものが見えませんが、これは「昔はたくさん椿が生えていたという」とあるので、このころすでにツバキはあまり見られなくなっていたようです。この『雪の道奥雪の出羽路』の旅から六年後に再びここを訪れた時の『おがらの滝』でも、次のように書いています。

椿の浦に来けり。恩荷の浦輪、津軽の田沢、おなじ深浦の舳作の岬などを椿崎、椿山てふ名ありて、椿もとも多し。こもむかしは海榴の杣ありしかど、けぶりのためにこりつくして一もともあらざなれど、浦の名におふ春もおかし。時もいま花咲椿うらくくと霞むしまや霞むつりふね鹿浦の坂とて寒水流るゝをよち、雨形の磯のあたりより雄嶋雌嶋のふたつ、鴛鴦のやうに浮たる波の上に霞ぬ。

（『おがらの滝』文化四年三月二十二日の項）

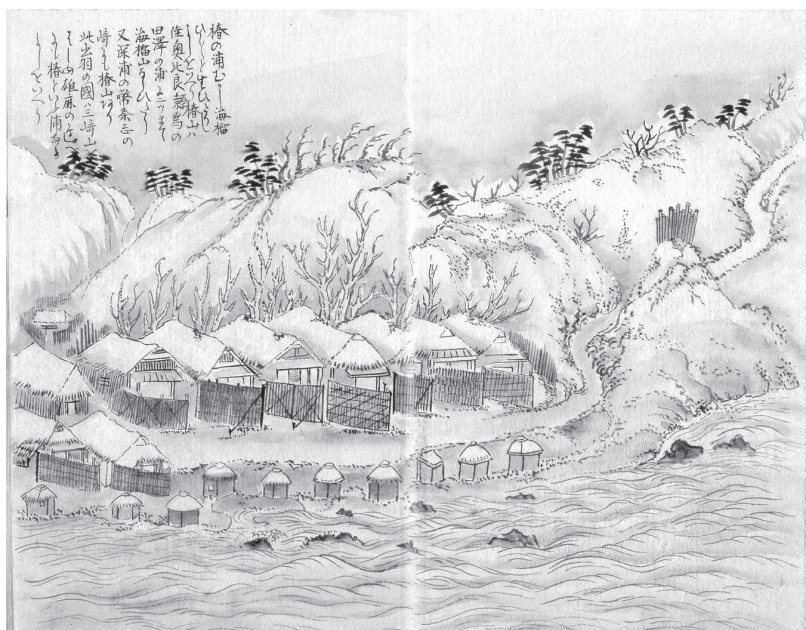


図 13

けぶりのため、つまり薪にするために伐つてしまい、一本も生えていないというんですね。現在もところどころにパラパラとツバキの木は見られますが、群落をつくるほどの規模にはなっていないですね。椿漁港のすぐ北側に^{はせ}盛鉾山という精錬所があつて、平成元年（一九八九）まで操業していました。前に真澄の足跡調査をした時、ここに住んでいる方から、その煙害でだいぶ枯れてしまったと聞いたことがあります。いづれにしろ、椿という地名が残っている場所にツバキの花が見られないのは残念なので、ヤブツバキを植栽するなどして再び「椿の里」にしたらどうか、と思うのですが、いなかでしようか。

（五）男鹿半島能登山

三崎山、夏泊半島、舩作岬、八森椿海岸とめぐって、最後に文化元年（一八〇四）の日記、『男鹿の秋風』に記された男鹿半島のツバキを見てみましょう。

脇本城跡は、戦国時代の秋田で勢力をふるっていた安東氏が築いた山城跡といわれていますが、その一角にあるかつての天満宮、菅原神社境内に、菅江真澄が「細葉の海榴」と記したヤブツバキの古木があります。「天神様の細葉の椿」の名で呼ばれる通り、葉が少し細く、花はピンク色をした珍し

いやブツバキです（図14）。

真澄が来たころすでに古木の貫録があつたようですから、少なくとも樹齢四百年以上と推定されています。ただ、よく見ると根元が空洞になつていて、このままではこれから五十年、百年もたないのでは、とちよつと心配なんですから。真澄はこの天満宮に詣でた後、脇本城跡を横切る峠道を上り下りして、男鹿の人は南磯と呼ぶ南海岸に歩みを進め、椿の浦に至ります。次にその部分を読んでみます。

山の九曲を、なから下りなんのながめいとよし。椿の浦と



図 14

いふ、そこに中山とてちいさき磯山あり。それにこと木はまれに、椿のいと多く生ひしげれり。津軽の郡に在る比良内（平内）の田沢といふ浦にも、磯山のふたつまで、こと木はさらに一もとあらで椿のいや生ひしげりて、花の盛なるころは朝日夕日のさしかぎろひ、浪も紅に染渡りておもしろきところあり。おなじ津刈の深浦の湊に近き弊奈志の崎の寺嶋のこなたにも、椿崎とて、大岩のいと高く立るあら磯の岩山あり、椿権現とて神の在す。そこにもむかし椿の多かりしかど、一とせ雪のふかりし年に、鹿のむれあさりて此椿の葉をはみ枯して、年ふる木は、やゝ七もと八もと斗浪かゝる岩のあいを生ひ立、さゝやかなる椿はいと多し。此出羽の八森山に近き浦を椿とて、むかし、磯山かげに椿のひしくと生ひたりし物語あり。こと国にもおなじ名ぞ多かる。三崎山のごとく、椿は海辺に生ふてふものにや。海石榴のから名も聞えたり。伊勢の国なる椿明神といふ神の在にひとしう、みな神といはふ。此中山も、陰陽門の神とていやまひまつれり。そこに水渟の岩あり、苔の深うむしたる石の墓誌めけるものありて、おきつきのごとし。さりけれど、のりありて、人ののぼらん事かたし。弊奈志の浦にもさはいへど、たなつものをさまればよちのぼりまうで、はた、多かう葛葉を茹りて馬草とせりけるた

めしもありつれど、此浦には、ゆめゆめさざるならはしと
なん。中山のきしにいと清き泉のありて、行かいひの人む
すばぬはなし。路のかたはらに石の堂ありて、あやしの仏
ぞおはしませる、是をも円仁の作らせ給ふと語る。

〔『男鹿の秋風』文化元年八月二十五日の項〕

男鹿半島の椿海岸の絵（29ページ、図1）をもう一度ご覧
ください。まず本文で「中山という小さい磯山がある」と言っ
ているところ、この絵の中央に描かれている椿山のことを指
しているのは確かなのですが、中山は実際には東隣の集落の
台島と椿海岸を隔てる丘陵地帯を指します。ここでの椿山に
関する記述は内容的にみて、地元の人に取材したと思われる
聞き書きの形式をとっているので、取材時に聞き違えたので
しょうか。ただし、真澄が訪れたころは能登山とまだ呼ばれ
ていなかったとも考えられます。

ここでもお決まりのように、これまで自分が訪ね日記に記
した津軽と出羽の椿の名所を詳しく紹介し、椿は海岸地帯に
多いこと、「海石榴」の中国名、伊勢の椿明神と同じくどこ
でも神として祀っていることなどをあげています。真澄らし
いフィールドワークに裏付けられたこうした考察からは、椿
に寄せる特別な思いが伝わってきます。

この写真は真澄の絵とほぼ同じアングルから撮った現在の
椿の浦―椿漁港（図15）、そしてこれが国指定天然記念物
ツバキ自生北限地帯の椿山―能登山です（図16）。



図15 矢印が能登山



図 16

湾内を埋め立てて港が造られ、真澄の絵では海に突き出ている岩山の前を県道が通り、随分様変わりしたのがわかります。てっぺんにあるお堂は、真澄が訪れたころは妙見堂と言っていたようですが、明治の神仏分離で星辻神社となりました。妙見信仰は北極星と北斗七星を神格化し、星の運行から吉凶や運命を占う北辰北斗信仰とも重なることから、海上を行く船が星の位置を見て進路を決めるということで、ここでは漁の安全を祈る漁師さんたちに信仰されているようです。

江戸時代末期の男鹿の地誌ともいえる『絹飾』(註7)という文献に、「山上に池あり」との記載があります。現在、池は見られませんが、真澄が見た「水たまりにある苔むした墓石のようなもの」と思われる岩片が、星辻神社のお堂の中に保管されています。地元のお年寄りの話では、かつてはこの石を縄で結び、井戸の中に何度か入れたり出したりして、雨乞いに用いたそうです。椿山の禁忌として、嵐がおこって漁師が海に出られなくなるので、登ってはいけないというのは、わたくしも子どものころ大人から言われたことがあります。それでも、学校の帰りによく立ち寄ってツバキの蜜を吸ったりして遊んでいたんですけれども。

真澄が「行きかう人がみな立ち寄つてのどをうるおしていく」と記している井戸は、今も残っています。上水道が整備

される昭和三十年代中ごろまでは、集落の共同井戸として使用されていました。この井戸は昭和三十年（一九五五）刊行の『岩波写真文庫63男鹿半島』に掲載されていて、その写真のキャプションが「比丘尼井戸」となっているんです。ところが、井戸の近くに住んでいる方やお年寄りに聞いてみても、「比丘尼井戸」という名は誰も知らないのです。写真文庫が刊行されたころ、わたくしは小学校にもまだあがっていないのでこの井戸が何と呼ばれていたか記憶がなく、その後も「比丘尼井戸」の名は一度も聞いたことがありません。編集者が勝手に名付けたということはないでしょうが、不思議です。

『岩波写真文庫』は、岩波書店が一九五〇年代に出版していたテーマ別の写真集叢書というべきもので、「地誌・新風土記」をテーマにしたものは当時の民俗写真集としてもすぐれており、特に八郎潟の氷下漁を表紙にしている「男鹿半島」は、柳田国男、菅江真澄などの著作を読み込んでいる民俗学に造詣の深い人が執筆や編集に関わっていることをうかがわせます。

柳田国男は真澄と同じようにツバキに関心を持ち続けた人で、その著書のなかでたびたび北国に咲くツバキに言及し、人魚の肉を食べて不老不死になった娘が尼になつて各地を放浪しながらツバキを植えていったという八百比丘尼伝説を引

き合いに、本来は暖かい地方の植物であるツバキが北上する過程には人との交流の歴史があり、その分布は比丘尼など諸国をめぐる宗教者たちによって人為的に移植されたものではないか、と自説を述べています。能登山の麓の井戸が「比丘尼井戸」だとすれば、柳田の説との関わりを示唆するのでも重要なことなのですが、今のところそれを確かめるまでには至っていません。

能登山の麓にはこの「比丘尼井戸」のほかに石碑や石塔、祠など興味深いものが散在しているのですが、そのひとつに円仁のつくったという何だかよくわからない仏像——「あやしの仏」と真澄が書いている石仏があります（図17）。

今見ても風化して何の像か定かではないのですが、『絹飾』ではこの石仏の祠を「尼ヶ崎宮」と記しています。ここでも「比丘尼井戸」と関連があるような「尼」ということばが出てきます。『絹飾』ではまた「村の中に岩の小山あり、能登金と云。（中略）この岩山、往古能登國尼ヶ崎と云處より流れ来りしと云ふ」ともあり、わたくしの知る限り、これが椿山＝能登山として能登半島との関連が記載された初めての文献ではないかと思われます。

今年（平成二十八年）の三月に石川県能登半島の珠洲市で、「椿セミナーinすず ヤブツバキとまちおこし」という催し



図 17

があり、わたくしがパネリストと呼ばれて男鹿半島と能登半島とのツバキの関わりを話してきたんですけど、その時にちょうどよい機会と思い、「尼ヶ崎」を探してみました。ですが、尼さんの「尼」を冠した地名はどこにもなくて、海士＝漁師や潜って漁をする人を指す「あま」の地名を二か所見つけて行ってみました。一か所は能登半島西岸の志賀町にある「海士岬」ですが、行ってみたら灯台があるだけの茫漠

とした海が広がる殺風景なところでした。もう一か所の輪島市海士町は海女の島として知られる舳倉島の人たちが多く移り住んだ町というのが、町名の由来でした。

結局、能登山の「尼ヶ崎宮」との関連は発見できなかったのですが、能登半島から帰ってから『秋田六郡三十三観音巡礼記』（註8）という享保年間（一七一六～一七三五）に成ったとされる興味深い文献を見つけました。それには「第二十六番 秋田郡男鹿椿村に一字堂有り、（中略）此岩穴に海士が先の地藏とてあり。浦島此處に來りし時、海士と現し先達し玉ひし故に、あまが先の地藏といふとなり」とありました。つまり「尼ヶ崎」は「海士が先」で、道案内、先達としての海士を指しているというわけです。

ツバキと海士（海女）の関連については、海女が潜る際に体に椿油を塗って体温を保つことや、海底を見る透明度を得るため海面に椿油を撒いたことなどから、北国にツバキを持ち込んだのは潜水漁撈を行う海女たちだとする仮説を述べた、野村純一さんのすぐれた論文があつて（註9）、それに柳田国男の比丘尼説も加えると、この「尼ヶ崎宮」の「尼」は一筋縄ではいかないなあ、と思つているところです。

「雨乞いの石」、「比丘尼井戸」、「尼ヶ崎宮」など、能登山にはよくわからないことが多いのですが、もうひとつわたく

しが最も不思議に思っていることがあります。それは「能登山の椿伝説」です。ここからがようやく今日の本題です。

三 夏泊半島と男鹿半島の椿伝説

能登山に椿にまつわる悲恋伝説が残されていることは、ここにいらつしやるみなさん、特に男鹿市に住んでいる方はよくご存知かと思います。先に述べましたように、菅江真澄は夏泊半島の椿山の伝説を詳しく、それも年数を経て二回も記しています。ところが能登山の椿伝説については、全く触れていないのです。そして現在わたくしたちが知る能登山の椿伝説のストーリーは、夏泊半島のものとはほぼ同じです。

真澄の伝説の著述方法としては、人に取材しての聞き書きと、文献からの写し書きの二通りあるかと思っています。例えば『十曲湖』^{とわのうみ}という日記に八郎太郎と南祖坊の戦い、いわゆる「十和田湖伝説」を詳細に書き記しているのですが、その内容は真澄の記録より百年以上前の元禄年間（一六八八～一七〇四）に書かれた『吾妻むかし物語』からそっくり引用したものです。では、夏泊半島の椿伝説はどうかというと、おそらく人から直接聞きとったものを書き起こしたと思われる。真澄以前にこの伝説を物語仕立てで記した文献の存在はわたくしの知る限り確認されていないことや、三十年近く経ってから

ほぼ同じ内容のものを再録している『筆のまにまに』のなかで「椿明神は伊勢国にませりこそ、そも伊勢よりむかしうつしまつる御神にやと、浦人に問えば、いらへて、いな此神は女神也。むかし此浦にみめことがら世に勝れたる女あり」と、問答形式にしていることなどがその理由です。

能登山ではたまたま取材対象となる人が見いだせなかったからでしょうか。そうとは思えません。著作からわかっているだけで、天明五年の『粉本稿』、文化元年の『男鹿の寒風』と計四回に渡り能登山の前を通っていること、真澄の椿への関心の高さから判断すると、伝説を話す人がいなかった、つまり現在流布されているような悲恋伝説は当時伝わっていなかったと考えるのが自然です。では、能登山の伝説はいつごろ生まれたものなのでしょう。わたくしの調べた限りでは、江戸時代はもちろん、明治、大正、昭和の初めまで該当する文献を全く見出せませんでした。

お手元の資料をご覧ください。戦前にひとつだけ、小野進さんという方が昭和七年（一九三二）に出した『名勝男鹿』という冊子に「能登山は言い傳へには、むかし能登の国から流れて来たといふ。（中略）同じ指定北限地でも、青森県小湊駅の北十二キロの東田澤の椿山は、約二十ヘクタール（二十

町歩)の地が椿の純密林で、周り一・五メートル位の大樹もある。この椿山は又、昔越前の商人横峰何某が愛人への記念に植えたものと伝えられて、山の字の名も横峰と呼ばれる。能登といひ越前といひ、何れ北陸筋のローマンスの絡まるのも一奇である」という文が載っています。二つの椿山の言い伝えが、どちらも北陸地方と関連していることに注目していますが、能登山の椿伝説には触れていません。

あくまでわたくしの調べた限りとお断りしておきますが、能登山の伝説を初めて活字として見い出せるのは、先ほど「比丘尼井戸」のところで取り上げた昭和三十年の『岩波写真文庫63男鹿半島』です。「北緯四十度線に沿って椿の自生北限地が幾つかある。椿の能登山もその一つ。能登からこの地に来た船乗が、土地の娘に頼まれて持ってきたといい伝えられている。青森県椿崎にもこれと似た話がある」とあります。さらにちゃんとしたストーリー仕立てで活字となった最初のは、昭和三十三年(一九五八)に未来社から刊行された『日本の民話10秋田の民話』の「椿の乙女」ではないかと思えます。日本全国の民話、伝説を採集して歩いたことで知られる瀬川拓男さんと松谷みよ子さんが編者となっています。

配布資料に松谷みよ子さんが再話した物語を全文載せていますのでご覧ください。悲恋物語としてとてもよくまとまっ

ていて、現在流布されている能登山の椿伝説は、ほとんどがこれをベースにしているといってもいいでしょう。その後、昭和四十一年(一九六六)に秋田魁新報社から刊行の『秋田民話集120選』などによって広く知られるようになるのですが、どちらも物語の骨格は夏泊半島の伝説と完全に同じです。

「再話」とは辞書によれば「昔話・伝説などを、言い伝えられたままではなく、現代的な表現の語に作り上げること」(『広辞苑』)とあります。松谷みよ子さんは児童文学者として有名ですが、採訪で集めた話を作家力で話を膨らませ、子ども向きにわかりやすく書き直すことも含まれるようです。ただここでひとつ気になることは、『日本の民話10秋田の民話』に掲載されたほとんどの民話の末尾に採録した話し手の住所と名前が記載されているのに、「椿の乙女」ではそれがないことです。この話をどこの誰から採集したのかがわからないのです。

瀬川拓男さんがこの本のなかで「むかし、親しく秋田に旅をした菅江真澄をしのびながら、私たちもまた昨年から今年へかけて、親しく秋田の山や里や浜辺をまわりましたが、果たして民謡とならべて、秋田が民話の宝庫であることも知りました」と書き、また「男鹿半島へ行った時は、船川中学の

磯村朝次郎先生や水産高校の沢木隆子先生と、まるで兄弟のように仲良しになって一緒に研究もした」と書いていることがこの疑問に答えるヒントになるかと思っています。

昭和二十年代の終わりから三十年代の初めという時期は、幾度かの合併で男鹿市が誕生した時で、また、昭和二十七年（一九五二）に秋田魁新報社の秋田県観光三十景で男鹿半島が一位に選ばれ、翌年には県立公園に指定されて、男鹿半島を観光で売り出そうという機運が一気に高まったころなんです。その一環として「男鹿小唄」と「船川音頭」という新民謡も作られました。資料に歌詞を載せているのでご覧ください。

「男鹿小唄」の一番に「波が波呼ぶ男鹿の春 咲くは椿か おぼこの恋か」、「船川音頭」の一番に「赤い椿はなア 乙女の胸よ 燃えてほのぼの春を知る」というフレーズができますね。これは椿の伝説をモチーフにしているのではないのでしょうか。歌詞はいずれも男鹿の人ではなく、プロの作詞家によるもので、詞作のための情報提供に携わるプロデューサー的な人がいたのかもしれない。

さらに注目すべきなのは、昭和二十七年は「男鹿五風」と呼ばれる真澄の男鹿紀行五編と『氷魚の村君』の口語訳『新訳 真澄翁男鹿遊覧記』が刊行された年でもあることです。

これによって、男鹿の人びとにとって真澄がとても身近な存在となったと思います。この本をいわば「タネ本」として、「岩波写真文庫」の編集者や瀬川拓男さんたちが「真澄をしのびながら」男鹿の旅をし、その過程で男鹿の観光振興に真澄の記録を活用しようと考えていた識者たちとの交流があり、そのなかで夏泊半島の椿山伝説を知る機会があった、あるいはすでに能登山に伝わる物語として聞いたということは容易に想像されます。ただ、先ほど述べたように、『日本の民話』の「椿の乙女」には肝心の語った人、話者の名が載っていないので、そのことを証明するためにはもう一度徹底的に傍証資料を調べ直してみる必要があります。

お手元の資料にあげているように、夏泊半島には、真澄が書き留めたものとは異なる椿明神の草創の記録や（註10）、細部が異なる伝説を記した文献が残っています（註11）。伝説を語り伝えてきた人びとがいてその採録が行われ（註12）、椿神社をめぐる伝説と信仰に関する学術的な研究も行われてきました（註13）。また、地元東田沢の人の手によって伝説の主人公である二人の名―お玉と嘉平―を刻んだ石碑や像がつくられたりするなど、江戸時代から現代まで、夏泊半島の椿伝説はその土地に根差した豊かな広がりを持って伝えられてきたのがわかります。こうしたことを勘案すると、

印刷された本の中にだけしか存在しないかのような能登山の椿伝説は、夏泊半島から移し替えたもの、それも戦後になってからと考えざるを得ません。

おわりに

昭和五十年（一九七五）に秋田県立博物館が開館した時のテーマ展示「菅江真澄と秋田の風土」の解説資料に、「伝説ということばの誕生は比較的新しく、いい伝え、いわれが古い用語である。伝説は具体的な事物に直接結びついて語られるところに特徴がある。特定の山・沼淵・木石・旧家などが登場し、語り手自身そのいい伝えが真実であるのを信じ、またきき手にもそれを要求する。そこに語り手自体が話に責任をもたない語り口を示す昔話とは明確な相違がある」と書かれています（註14）。

男鹿半島で幼少年期を過ごしたわたくしの実感、体験に照らしてみても、「椿の乙女」の語り手としての大人たちがまわりに全くいなかったこと、伝説に結びつく具体的な事物、背景となるものがなく、ただ「物語」があるだけという能登山の椿伝説は、ここで述べられている伝説の定義にあてはまらないといつていいかと思います。

ただし、わたくし自身はこの伝説を嘘っぱちで価値のない

もの、剽窃といったようなことばでは全く捉えていません。能登山の椿伝説はすっかり定着して、観光パンフレットには必ず掲載され、今は男鹿半島のみならず秋田県を代表する悲恋伝説として語り継がれています。能登山がヤブツバキの自生北限地帯に指定され、椿伝説の地として男鹿の人びとに誇りをもって大切にされている。そのことは素晴らしいこと、そしてとてもラッキーなことではないでしょうか。その陰の立役者がわが菅江真澄であること、そこに真澄の記録の影響力の凄さ、偉大さを感じとれるのも、能登山のそばで生まれ育ったわたくしがこの伝説に愛着を持つ理由のひとつになるかもしれません。

時間配分を間違えて、おしまいの方の肝心な部分を端折ってしまい、中途半端でわかりにくい話になってしまいました。能登山の伝説に関連して「をがさべり」で柳田国男が書いている男鹿の椿についてもお話したかったのですが、与えられた時間が過ぎてしまいましたので、この辺で終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

〈付記〉平成二十八年七月九日、秋田県立博物館講堂における講演を、要旨が変わらない範囲で削除・加筆などをおこなひ、通読しやすいように文章を整えました。

- (1) 『天然記念物つばき自生北限地帯緊急調査報告書』
男鹿市教育委員会 二〇一三
- (2) 『男鹿市史上巻』三〇一―三〇四頁 男鹿市 一九九五
- (3) 『菅江真澄全集 第三巻』四三九―四四二頁 未来社
一九七二
- (4) 内田武志は『菅江真澄全集 第三巻』の『津軽の奥』
解題において、原本を書き写す際に「図絵の模写を省
略して、本文のその箇所に図絵があつた旨を記してお
いた注であろうと推測する」としている。
- (5) 『青森県夏泊半島横峰および小湊越「通称椿山」風致
保安林調査報告書』青森林業試験場 一九七五
- (6) 半田和彦「男鹿の鹿狩り」『出羽路一五二』二〇
一一
- (7) 船越村在住の村役人、郡方勘定役を務めた鈴木重孝
による男鹿の地誌、古記録。本文三冊、図巻二巻か
らなる。秋田県指定有形文化財
- (8) 『新秋田叢書 第三巻』所収歴史図書社 一九七一
- (9) 野村純一「椿は何故春の木か―八百比丘尼と常陸坊海
尊」『日本伝説大系別巻一 研究編』所収

(10) 享保一〇年（一七五二）の『平内御領々社堂開基』
によれば、椿明神の祭祀は横峰嘉兵衛の妻に神が乗
り移って託宣をしたことから始まったという。

(11) 主なものに寛政九年（一七九七）の工藤白龍『津軽
俗説選』、明治九年（一八七〇）の『新撰陸奥国誌』、
昭和十六年（一九四一）の大瀬熊三郎『平内志』な
どがある。

(12) 『浦田の民俗』調査報告書『青森県立郷土館 一九
八一、『夏泊半島における宗教民俗誌』弘前大学人
文学部宗教学研究室・民俗学研究室 二〇〇五

(13) 小池淳一「椿の伝承」『古代の東北―歴史と民俗―』
所収 一九八九、小池淳一「椿をめぐる伝説と祭祀」
『半島空間における民俗宗教の動態に関する調査研
究』所収 二〇〇六

(14) 出典は大間知篤三『民俗の事典』三七六―三七七頁
岩崎美術社 一九七二

※本稿に使用している図絵は、図9のみ『秋田叢書別集 菅
江真澄集 第六』からの転載で、図5は大館市立中央図書館蔵、
図1、図12は秋田県立博物館蔵写本のもを使用しています。

反故紙と茶色白格子模様表紙に関する一考察 くすしの証明と地誌編纂前夜の装幀

松 山 修

はじめに

当館で発行している菅江真澄資料センター日より「かなせのさと」では、第一五九号（平成二十八年八月十七日発行）から四号に亘って「真澄と薬草」のタイトルで小論を述べた。

この小論では、菅江真澄が医者（くすし）であることの論拠として、書冊四冊の「裏打紙」を取り上げた。その四冊とも共通するのが、表紙が茶色白格子模様（『菅江真澄全集』の解題での命名）であったことである。

本稿では、これまで話題になることが少なかった裏打紙、つまり反故紙^{ほごがみ}が持つ資料的価値について論じるとともに、合わせて十七冊にも及ぶ茶色白格子模様の書冊が装幀された年代について考えてみたい。

なお、本稿でいう「裏打紙」「裏紙」などは、表紙に厚みをだすために用いた反故紙のことであり、草稿や書き損じなど使用済の料紙が使われている。

反故紙に書かれた内容を吟味するなどして、本稿の前半は真澄が医者であったことの証明をおこない、後半は茶色白格

子模様表紙が装幀された年代を推定することを目的とする。

考古学で漆紙文書が古代日本の政治や人々のくらしの解明に役立っている例に倣って、反故紙を資料として見る一例を本稿は示すことになるだろう。

一 医者（くすし）の証明

菅江真澄が医者であったか、あるいは医者としての技能・技術を有していたか、それを証明することはやさしいことではない。

例えば、真澄が「金花香油」という塗り薬を製薬していたことはよく知られており、そのことを伝える資料は数多くある。しかし、家伝薬を製薬したり、薬を調合することは医者であったことの証明にはならない。

なぜなら、当時の医者とは、現在の医師と薬剤師とを合わせた技能・技術であったから、薬を調合する前提として、患者への診察によって病気や病状への見立てがあつたか否かの証明が必要だと考えるからである。

秋田俳壇の宗匠であつた吉川五明きつかわごめいの備忘録である『五明住所録』（原本は個人蔵）に、「尾張駿河町 白井英二 医也」と記されていることは、少なくとも真澄自身が医者であることを自認していたことにはなる。

また、文化十一年十二月六日付「佐藤太治兵衛宛書簡」（全集第十二巻・190頁掲載、原本は館蔵）に書かれた「おつるどの薬料、七匁之内四百銅たしかに落掌仕候」からは、真澄が薬の代金を受け取ったことがわかる。

薬料として書かれた「七匁」が銅（銭）でどれぐらいの金額にあたるかは、右の記述だけでは即断できない。

当時の庶民が使う貨幣の単位は銭貨であつたから、薬料を示す真澄の書簡に銀貨の単位である「匁」が突然出てくるのは不審であるが、「四百銅」とわざわざ書いていることから、「匁」を銀貨の単位としてそのまま見ておきたい。

半田和彦著『秋田藩の用語解説』（秋田文化出版）にある「貨幣相場」によると、江戸時代を通しての銀一匁の銭値段は、時代によつて二十二文（享保四年（一七一九）から八百文（天保十年（一八三九）まで）と大きな変動がある。しかしながら、真澄の当該書簡が出された文化年間（一八〇四～一八）は、百十文前後で推移している。すると、「七匁」は七百七十文前後になるのだが、これには真澄と太治兵衛双方が、銀一匁

を銭に換算した際の共通理解のあることが前提となる。あるいは、銀一匁＝銭百文の換算での共通理解があつたのではあるまいか。

金花香油が一匁四十文であつたことが、「小西宮太郎宛書簡」（平成二十六年度展示図録『菅江真澄、旅のまなざし』）などで紹介、原本は館蔵）から知られるから、仮に七百文としても、この薬料は高額の部類に入るであろう。

いずれにしても、薬料の七百文（真澄は、「文」を銭・泉のほか、匁と表記することがある）が金花香油だけの代金というわけではないだろうから、「おつる」の病状に合わせて施薬された他の薬であつたと考えられるのである。ただし、これもやはり推測の域を出ない事柄である。

真澄が医者であつたことの客観的な証明となると、現存する資料では、『花のいではち松藤日記』の「表表紙裏打紙」（反故紙）が唯一であると考ええる。

この資料は、全集第十二巻・107頁に翻刻されているが、当館での展示紹介に際して、何度か手直しを施しているので、実際を後掲の写真（資料1）で示しておきたい。

これは、もともと表紙に厚みをだすための「表表紙裏打紙」だったものが、表紙を改装する際、何か大事なことが書かれているようだと理由から、それらが見えるよう書冊の頁と

して綴じたのだと所蔵者から聞いている。

資料1の写真でもわかるように、真ん中に横の折り目があり、しかも折り目の向かい合わせに文字が書かれている。

半紙二つ折りの大きさ（約二十四×十六^サ、「半紙本」と呼ばれる）である《花のいではち松藤日記》から考えると、半紙を半裁したものを二つ折りにし、その折り目を下小口にして綴じ合わせたものである。当然のことながら、和本は右綴じであるから、折り目が上小口になると文字が逆さまになってしまう。

この体裁は、大館市立中央図書館・真崎文庫にある『乙随筆』（当館『真澄研究』第七号で翻刻紹介）と同じである。

二つ折りにされた半丁（洋装本の一頁のこと）に、患者一人についての処方が書かれている。それに大きく数字を書くのは、代価を示している。実際は朱墨である。

この処方が患者ごとに異なっているのは、その前提として、真澄による患者への診察、つまり病気・病状の見立てがあったことを意味する。現代という処方箋である。それこそが真澄が医者であったことの証明となるのである。

ここで紹介している《花のいではち松藤日記》の「表表紙裏打紙」に書かれていることを、後で紹介する三冊の書冊（《風の落葉二》《さくらがり下》《風の落葉一》）との比較のため、

土地、名前、薬方の順に箇条書きにする。

また、資料1の写真には、《花のいではち松藤日記》に綴じ合わされている順にア・オの記号を付けたので、その順に書き出しておく。なお、□は不明文字、「」内は割註、（）内の数字は朱書されている代価（薬料）を示す。

ア上 □^{不明}田横町 北村甚兵衛 兵治 妻 煎方 T 理才

一

イ上 □^{不明}門前三倉丁 かね堀長太 □^{不明}調散 煎方 T 理才

瘧 也郎（七十五）

イ下 「辰十月初「昨夜由雪」 十狐町 染屋勘助 金白

竜 紅国利才」（百五十）

ウ上 「廿四日夜 田町坂ノ上九助 達生散」（五^{不明}□）

ウ下 □^{不明}町 おはノ子 金助四歳男子 一」（五^{不明}□）

エ上 「閑居町 青柳小奎 金花油 一具」

エ下 「廿三朝大霜快晴 花岡日詰内 甚七甚六ドモ

紅州利白 美根」

オ上 「三日 長倉町横町 泉弟蔵 金油 一」（二百

オ下 「与右衛門母 血薬 ○残二貫二百匁」

二 地域の特定と反故紙の順序

《花のいではち松藤日記》の「表表紙裏打紙」に書かれた
処方箋について、いくつかの分析をしておきたい。

地名については、ア上から順に、^{不明}□田横町、^{不明}門前三倉丁、
十狐町、田町坂ノ上、^{不明}□町、閑居町、花岡日詰、長倉町横町
とある。

この内、イ下の十狐町（現在は独鈷町）、ウ上の田町、エ
上の閑居町（愛宕町の別名）、オ上の長倉町は、現在の大館
市中心街にその地名を探し出すことができる。そのため、ウ
上の田町坂ノ上、オ上の長倉町横町は、場所の詳細を表すた
めの住所表記となるだろう。

イ上の「門前三倉丁」の場所の特定はできないが、イ下と
は料紙の表裏の関係にあるから、現在の大館市街とも考えら
れる。大館市街には、大館城代佐竹西家の菩提寺である曹洞
宗宗福寺が大館市豊町にある。また、中世の浅利氏の菩提寺
である曹洞宗玉林寺、それに浄土真宗淨応寺・法華宗蓮莊寺
が寺町を形成するように大館市大町近くにあるから、いずれ
かを指すのではないかと考えておきたい。

エ下の花岡は、大館市中心部から北に位置する地域である
から、花岡日詰も場所の詳細を表すための住所表記となる。

ア上の^{不明}□田横町は、秋田市の久保田横町（あるいは窪田横
町）が考えられる一方で、大館市にも現在の長倉町と谷地町

近くにそれぞれ横町があった。資料1の写真では、「田」の
上に見える文字が秋田市と大館市の地名のいずれにもあては
まらないように見えることもあり、ここでの判断は避けてお
きたい。

こうしてみると、不明のア上を除くと、ここで指し示
しているのは現在の大館市の地名となる。

当然のことではあるが、イの上下、ウの上下、エの上下、
オの上下がそれぞれ一枚の料紙の表裏であること、それに幸
いにも日付が書かれていることから、もともとの綴じられて
いた順序を考えることができそうである。

ここで考慮したいのは、綴じ目（綴じ紐を付ける側）がど
ちら側になるかということである。

例えば、イ上の右側に綴じ目があったとすると、冊子のノ
ドの部分（中心部）に文字が書かれることになり、文字がと
ても書きにくい。一方、イ下の左側に綴じ目があると（和本
であるため綴じるときは右側になる）、裏側にあたるイ上が
端の方から文字を書くことができることになる。

これらのことを考慮すると、

「イ下↓イ上↓オ上↓オ下」

「エ下↓エ上↓ウ上↓ウ下」

「ア上」

の順となる。

右の「」内は一続きのものと考えられるが、他の「」との前後は確定できないことを表している。

さて、ア上ノオ下にある処方箋には、患者の病状に適合した薬が処方されている。順に「理才、^{不調}調散、金白竜、紅国利才、達生散、金花油（金花香油）、紅州利白、美根、金油（金花香油）、血薬」となっている。

真澄が製薬した「金花香油」同様、薬名は独自の調合による家伝薬と考えられるため、薬名から病状を知ることができない。

一人だけ、イ上に書かれた「門前三倉丁」に住む「かね堀長太」の家族なのである。「也郎」が「瘡（おこり）」で、「理才」という薬が調合されている。瘡は、真澄の持病でもあった。他の病名が記されていないのは、薬名を見ただけで、病状が特定できたということになるのだろう。

ところで、オ下に「与右衛門母 血薬 ○残二貫二百匁」とある。残金が二千二百匁（文）ということである。これは一貫四十文の金花香油の五十五個分の金額になる。当時の貨幣価値を現代のそれに置き換えることは、比較するための指標を何にするかで随分と数字が変わってくる。ここでは薬ということ、例えば、金花香油一貫四十文を、現代の市販薬

一箱の標準的な値段に置き換えてみると、その五十五個分だから、相当に高額になるものと理解しておきたい。

エ上とオ上には、金花香油と思われる「金花油」「金油」がある。このうち、オ上にある「金油」の代金は二百文（匁）になっている。先に見たように金花香油は一貫四十文あったから五個分の代金となる。この事から考えると、現在のような診察料というものはなく、患者の病状に合った施薬をおこない、その薬の代金を得ることが医者としての報酬になっていたことがわかる。

三 三冊の反故紙

内田武志が真澄研究をはじめた昭和二十年代、その集大成の一冊として『菅江真澄未刊文献集一』（昭和二十八年、日本常民文化研究所）を出版している。

その「金花香油」の項目に、表紙裏に使われた反故紙のことが書かれている。長文にはなるが、そのまま引用する。

なお、三冊の区切りを明確にするために、原文にはない傍線を付す。

〔風の落葉〕第二巻の表紙裏に貼られた反古紙は半紙を横折りに大福帳のさまに使用したのを、伸ばして適当に貼付けて

いるのであった。これに薬名と住所姓名などが列挙されてあるが、真澄自身の心覚えにすぎなかったらしく、また欠けた箇所も多くて容易に読みわけがたい。

まず秋田市に関係ある記事を挙げると、「…二日、馬〇〇町 伊之助一子」。これは馬喰労町の伏字であろうか。「十五日、大雪、馬〇〇町 八代彦太郎 又同家小児」。また「三ノ廊 谷内織部 内室」は久保田城内であろうか。これらの側に薬名らしく、「虎白二分散、可辛、美回、独文白、壁紅、壁辛」などのような文字が読まれる。

なお、「さくらがり」下巻の表紙にも同様の反古紙が使用されている。これには「六月七日 久保田 羽生氏方 丸薬百三包、百日分を 大葛大□三疊散入」。そして「此日 八幡台へ下る」と側にあるのは、これを記した場所を示しているものと考えられる。八幡台は北秋田郡下大野村八幡台である。これには、また、「早口 五十嵐権左門 母室」「早口 坂上 権重郎」などがあるから、北秋田郡早口町から米代川に沿って下ったその付近に居た頃のものらしいのである。この住所姓名の側には、薬名らしく「紅沙利、紅宿利、龍美車、紫枳貝、東回国」などのような文字がみえている。

〔風の落葉〕第一巻の表紙裏の反古紙も同様のものではあった。「水無 政川敬介」「水無 梅村武左門 子息」「水無

斎藤氏 室」また「…銀山 山本又衛門 小児」などともあって、「廿一日」の日付のほかに薬名らしい「文美車」など、いくつかの漢字がみえる。水無は今の北秋田郡阿仁合町である。

〔風の落葉〕第二巻の表紙反古紙にも同地方の地名が読まれる。

「水無下町 仁介 五歳男子」「水無 與助 室」「水無 斎藤重治郎」「水無 米屋団右衛門 おしも」「同処向家 仁兵衛 ムスメ豊」「木戸石 勘右衛門 室」「木戸石 藤島亀松」。そしてこの上方に「二月廿三日」とか「十日」などがあり、薬名らしい「紫萁」など数語がよまれる。

地名はすべて北秋田地方で、木戸石は八幡台と同じく北秋田郡下大野村である。このような山深い阿仁の人達が、しかも女子供が、病気の身をもって秋田の真澄のところまで出掛けてきたとは想像できないから当然その地に真澄が在ったころのものと考えるべきであろう。よってその時期はおそらく文政四年から一ヶ年間位の記録かと推測されるのである。前年末、北秋田方面を巡ってもさして著書を編んでいなかった。あるいは医薬に力をそゝいだたためであったかもしれない。そしてそれは「金花香油」だけの販売ではなかった。菅江家伝来と称して他の製薬のあったことは既に挙げた通りである。また、

『風の落葉』第一巻の裏表紙には真澄らしい筆で、眼病の手当てと薬を詳しくのべて、「松橋流伝来 羽州秋田 蘿園製」と云う反古紙があるが、こんなことから種々の薬を相当手広く商っていたらしく想像されるのである。

『菅江真澄未刊文献集一』108頁～109頁

ここに出てくる三冊の書冊は、現在、『風の落葉二』が秋田県公文書館蔵、『風の落葉一』《さくらがり下》が大館市立中央図書館蔵となっている。いずれも表紙は修繕されていて、内田武志が右のように報告した内容を、原本と照らし合わせて確認することはできない。

また、昭和五十六年に発行された全集第十二巻には、『花のいではち松藤日記』の表表紙裏打紙をはじめとする「裏書・貼紙資料」が八十項目紹介されている。それにもかかわらず、右の三冊の「反古紙」については、報告されていない。おそらく全集発行時における原本との照合ができなかったためと解釈しておきたい。

一方で、『さくらがり下』の全集解題では、同書の反故紙について改めて書き留めている。本稿の論を進めるにあたっては、こちらの記録を用いるため、次にその部分を引用する。

また診療をうけた患者と思われる人名と住所が列記された紙片が、やはり裏張りに使用されている。そこに真澄は、その患者に投薬した薬名も粗雑な筆跡で記入しているが、自分の心覚えのためだけであつたらしく、容易に読みとることができない。その例をあげると、

「六月七日 久保田羽生氏へ丸薬百三包、百日分を…」此日

八幡臺へ下ル」

「早口 五十嵐郷左衛門 老室」廿九日 新町 長崎氏 室」

「早口 坂上 権重郎」早口 嵐権左衛門 母堂」

(全集第十巻・523頁)

反故紙について、『菅江真澄未刊文献集一』では、『風の落葉二』が「表紙裏に貼られた反古紙」と「表紙反古紙」、《さくらがり下》が「表紙にも同様の反古紙」、『風の落葉一』が「表紙裏の反古紙」と「裏表紙…反古紙」などと表現されている。また、『さくらがり下』について、全集第十巻では「裏張り」と表現されている。いずれも実際の状態がわかりにくい。表現が揺れているように思われる。

ここで内田武志が強調したかったのは、それぞれの書冊における反故紙の状態よりも(書誌的な事柄よりも)、そこに書かれた地域の特定や真澄による施薬(医療行為となる)の

事実だったのであろう。

そこで、『花のいではち松藤日記』と同様に、書かれた事柄を書冊ごとに箇条書きにしておきたい。

《風の落葉二》（『菅江真澄未刊文献集一』の内容）

「…二日、馬〇〇町 伊之助一子」

「十五日、大雪、馬〇〇町 八代彦太郎 又同家小児」

「三ノ廊 谷内織部 内室」

「水無下町 仁介 五歳男子」

「水無 與助 室」

「水無 斎藤重治郎」

「水無 米屋団右衛門 おしも」

「同処向家 仁兵衛 ムスメ豊」

「木戸石 勘右衛門 室」

「木戸石 藤島亀松」

《さくらがり下》（全集第十巻・523頁の内容）

「六月七日 久保田羽生氏へ丸薬百三包、百日分を…」

「此日 八幡臺へ下ル」

「早口 五十嵐郷左衛門 老室」

「廿九日 新町 長崎氏 室」

「早口 坂上 権重郎」

「早口 嵐権左衛門 母室」

《風の落葉一》（『菅江真澄未刊文献集一』の内容）

「水無 政川敬介」

「水無 梅村武左エ門 子息」

「水無 斎藤氏 室」

「…銀山 山本又衛門 小児」

ここではまず地名を見ていきたい。

《風の落葉二》にある馬〇〇町（馬口労町）と三ノ廊（三ノ丸）の組合せは、現在の秋田市と大館市が考えられるが、三ノ丸にある「谷内織部」は、本稿次節で述べるように「古内織部」の間違いであることから、馬口労町と三ノ丸は、大館城下の地名となる。

《風の落葉二》と《風の落葉一》に、「水無」「木戸石」「…銀山」がある。水無という地名は雄勝郡にもあるが、「銀山」との組合せで考えると、やはり内田が指摘するように「阿仁合町」、かつての阿仁銅山の地名で、現在の北秋田市阿仁になる。木戸石は、北秋田市木戸石（平成の合併以前の旧合川

町木戸石。以下同様に旧町名を示す）である。

また、『さくらがり下』にある八幡台は北秋田市八幡岱新田（旧合川町八幡岱新田）、早口は大館市早口（旧田代町早口）であるから、新町は大館城下の町人町であった大館市新町と考えた方が妥当だろう。

『さくらがり下』には、「久保田羽生氏へ丸薬百三包」とあるが、これは他所にいる真澄から、久保田（現在の秋田市街）の羽生氏へ丸薬を送付したということである。

ここまで見てきたように、ここに示された地域を見ると、現在の大館市、それに北秋田市で真澄が医療行為をおこなっていた事実が浮かび上がってくるのである。

ところで、『花のいではち松藤日記』の「表表紙裏打紙」（反故紙）に書かれた地域は、ア上の不明箇所を除いて大館市に關するものであった。

すると、『花のいではち松藤日記』の反故紙に書かれた地域と、『風の落葉二』など三冊の反故紙に書かれた地域が大館市及び北秋田市であることが共通することになる。

さらに、いずれもが医療行為を内容としていること、それに大福帳様式であることから、これらがもと一冊の冊子だったのではないかと考えることができそうである。

その推測を成り立たせるのは、これら四冊がすべて茶色白

格子模様の表紙であることも挙げられる。これらが、同じ時期に装幀されたのではないかと考えられるからである。つまり、真澄が表紙を付けて装幀するとき、真澄の医療行為を示す患者の居住地、氏名、薬名とその分量、代金収受について記されていた大福帳様式の冊子を解体し、反故紙として利用したと考えられるのである。

『菅江真澄未刊文献集一』では、医療行為をおこなった時期について、「その時期はおそらく文政四年から一ヶ年間の記録かと推測される」としている。

一方で、『花のいではち松藤日記』の反故紙にあった「辰十月朔」は、文政三庚辰の年（一八二〇）を表していると考えられる。

また、真澄の自筆資料である『乙随筆』（大館市立中央図書館蔵）には、文政二年十二月二十二日の立春から文政三年二月にかけての歌が、現在の大館市や北秋田市で詠われたことがわかる（当館『真澄研究』第七号で翻刻）。さらに、大館市内に伝わる資料に、「母牟世以（文政）四年といふとしの春」（軸装「武迦式今を」、個人蔵）や「文政四とせといふとしの武都支（睦月）の九日」（冊子「旅寝しつる」、個人蔵）の年紀が書かれている。

それらのことから、文政二年～同四年、真澄が現在の大館

市・北秋田市地域を回りながら医療行為をおこなっていた事実が浮かび上がってくるのである。

四 反故紙に書かれた患者名

真澄の医療行為を示す反故紙が、《花のいではち松藤日記》《風の落葉二》《さくらがり下》《風の落葉一》で使われたことを前節までに述べた。

本稿でそれらに書かれた地名を特定していく過程で、いくつかの家をほぼ特定することができた。

それは、《花のいではち松藤日記》の工上にある「閑居町青柳小奎」、才上にある「長倉町横町 泉弟蔵」、それに《風の落葉二》の反故紙にあった「三ノ廊（廊の誤記） 谷内織部（古内の誤記）」である。

秋田県公文書館に、文化十二年（一八一五）八月に成立したとされる「大館城並びに城下居住絵図」（県C-193）がある。そこには、大館城下の内町と外町の町割が示されており、内町の侍屋敷については武家の氏名が書かれている。一方、外町に住む足軽などの下級武士、町人については氏名は書かれていない。

同資料のおよそをトレースした図を次に示しながら、今話題にしている地名を示す。

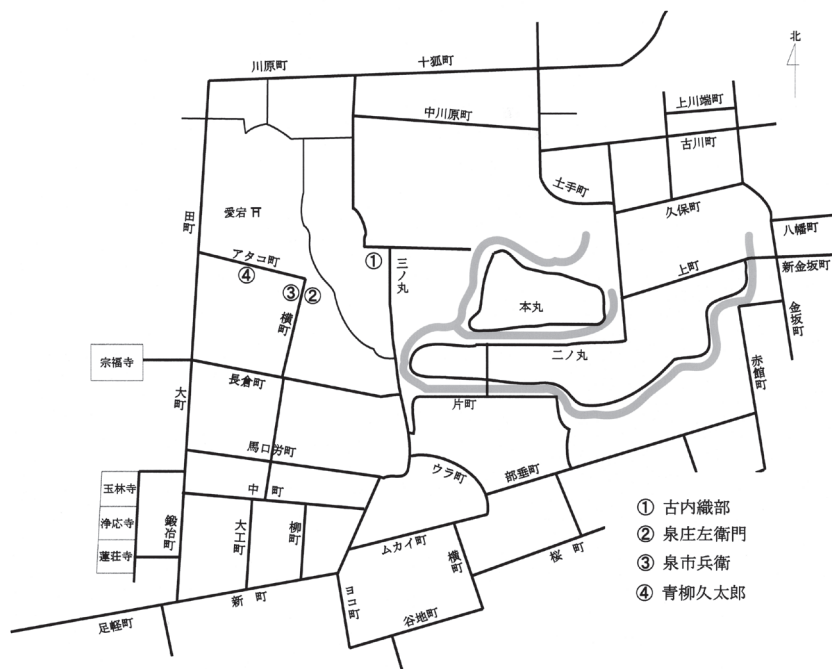
絵図によると、三ノ丸に谷内織部が住んでいた。実際の絵図に書かれた字のくずしを見ると、「古内」は「谷内」にも近いことから、《風の落葉二》での翻刻を「谷内織部」の誤記と判断した。

また、大館城の西側に位置する愛宕神社の南側の通りに「アタゴ町」とある。ここが「閑居町」とも呼ばれるところであった。この通りに、文化十二年当時は青柳家が一軒あり、「青柳久太郎」とある。真澄の医療行為があったと考えられる文政二年〜同四年は、この絵図が成立した文化十二年と五・六年の開きしかないから、この青柳久太郎が青柳小奎であったと考えていいだろう。

大館城下の横町は、長倉町近くにある。また、谷地町（現在の大館市立中央図書館の所在地でもある）の近くにもヨコ町と横町がある。

才上にある「長倉町横町 泉弟蔵」は、長倉町近くの横町ということであろう。当時の「町」は、現在の住所表示とは異なり、通りを挟んだ両側をいう。この横町にはちょうど通りを挟んで「泉市兵衛」と「泉庄左衛門」が居た。泉弟蔵とはこのいずれかの家を指すと考えられる。

繰り返しになるが、「大館城並びに城下居住絵図」（前掲）に名が記されているのは武家であることから、家をほぼ特定



元図：大館城並びに城下居住絵図
(秋田県公文書館蔵、県 C - 193、文化 12 年〈1815〉)

することができたのである。

一方で、水無、木戸石、新町、早口、銀山にも名字のある名前が書かれている。当時は、庶民であっても実際は名字を持つていながらそれを公称できなかったから（当館「かなせのさと」第六十四号でも紹介した）、名字が書かれているから、それがすべて武家であったとは限らない。真澄にしてみると、患者の家を間違はなく認識するために、名だけでなく名字も書いたものであろう。

現地調査をおこなうなど詳細な探究をすることで、それらの家が特定できる可能性はあるものの、本稿での探究はここまでにしておきたい。

五 茶色白格子模様表紙の冊子・十七冊

真澄の書冊に茶色白格子模様の表紙が使われているのは、前々節に挙げた《花のいではち松藤日記》《風の落葉二》《さくらがり下》《風の落葉一》の四冊だけではない。合わせて十七冊にもなる。

後述のために丸番号を付しながら十七冊を列挙するが、順不同である。また、下に書冊の分類と、現在の所蔵先を示す。

① かすむ駒形（日記、大館市立中央図書館）

② はしわの若葉（日記、大館市立中央図書館）

③ 筆のしがらみ（日記・雑纂、大館市立中央図書館）

④ 飛鳥山碑銘乾隆帝御纂文集中鹿角之記

（書写本、大館市立中央図書館）

⑤ 房住山昔物語（書写本・雑纂、大館市立中央図書館）

⑥ 雪の出羽路雄勝郡小野の七里（地誌、羽後町・三輪神社）

⑦ 花のいではち松藤日記（地誌、八峰町・山崎照雄氏）

⑧ さくらがり下（随筆、大館市立中央図書館）

⑨ 久保田の落ち穂（随筆、当館）

⑩ 椎の葉（雑纂、大館市立中央図書館）

⑪ 高志菜（雑纂、大館市立中央図書館）

⑫ 陸奥国毛布郡一事（雑纂、大館市立中央図書館）

⑬ 風の落葉一（雑纂、大館市立中央図書館）

⑭ 風の落葉二（雑纂、秋田県公文書館）

⑮ 風の落葉三（雑纂、大館市立中央図書館）

⑯ 風の落葉四（雑纂、大館市立中央図書館）

⑰ 風の落葉六（雑纂、秋田県公文書館）

ここに挙げた茶色白格子模様表紙の冊子は、すべて半紙本（約二十四センチ×十六センチ、半紙二つ折り）、袋綴、糸の掛け方は明朝綴である。

所蔵のうち、大館市立中央図書館蔵本は、明治から大正期にかけての郷土史家であった真崎勇助が、民間にあったものを収集したものである。

また、十七冊のうちで唯一「明德館図書章」の捺された『高志栞』は、藩校明德館に献納されたものであるが、他の多くの明德館蔵書が民間に流出したように、これも同様の道筋をたどった。

『明德館書籍目録（坤）』（大館市立中央図書館蔵）によると、「真澄遊覧記前編 五十四本」「真澄遊覧記後編「雪出羽道十四本、月出羽道二十四本」 三十八本」「外ニ恩荷奴金風一本」と書かれたものは、明治維新後、そのほとんどが旧藩主佐竹家にそのまま移されて、「佐竹図書」印が捺された。その後現在の所蔵者である辻家（秋田市）に移っている。

しかし、別立てで書かれた「風野塵泥」「ふみのはしたか」「高志栞」「花のしぬのめ」「かたあ袋」「雪の胆沢辺」「秋田のかりね」（ここでは異本）は、「ふみのはしたか」を除き、すべて真崎勇助が収集することになり、現在、大館市立中央図書館が所蔵する県指定文化財となっている。

ちなみに、「ふみのはしたか」については、東洋文庫『菅江真澄遊覧記5』・306頁に、「内容は、鷹の羽について図誌したものであったといわれる。大型本、全二十八丁。秋田

市加藤俊三氏から東京の高見沢忠雄氏に移譲されて、現在は所在不明。未発表」とされている。

六 茶色白格子模様表紙の装幀時期

前節に挙げた十七冊の茶色白格子模様表紙の冊子について、装幀年代を推定してみたい。

ここで言えるのは、反故紙、それに冊子の本文に記された内容から、装幀時期の上限（古い時期）を推定することである。つまり、それよりも古い年代に装幀されることはなかったとする年代である。

なお、茶色白格子模様表紙の装幀年代については、全集本ですでに内田武志が、これから挙げる事柄などを根拠として文政七年（一八二四）の装幀であると推定している。

一方、本稿の前々節では、反故紙に書かれた医療行為が文政二年〜同四年のものであると推測した。そのため、茶色白格子模様表紙の冊子が装幀された年代として、文政四年以降であることを一旦仮定して、一冊ごとの装幀年代を見ていきたい。

本節は、全集の内田武志の立証根拠を援用しながら、茶色白格子模様表紙を一冊ずつ確認していくものである。

なお、全集などからの引用にあたって、「」（鉤括弧）内

に引用文を書く場合、引用文自体にある「」（鉤括弧）をへへ（山括弧）に変更する。これは読みやすさを考慮してのことである。

① かすむ駒形

② はしわの若葉

《かすむ駒形》は天明六年一月～二月の日記、《はしわの若葉》は天明六年四月～六月の日記である。《かすむ駒形》の本文冒頭に「ことし天明八年といふとし戊申の正月朔日」とあるのは、《はしわの若葉》の序文に「天明八年戊申六月廿九日 菅江真澄」の署名があるのと同様、改写の際に年次を書き誤ったと考えられている。

改写された証としては、真澄の日記はすべて中本（美濃紙半裁二つ折り）の小型であるのに対し、二つの冊子がいずれも半紙本（半紙二つ折り）で、体裁が異なることも挙げられる。ただし、内容などから装幀（改写を含む）の時期を推測することはできない。

③ 筆のしがらみ

《筆のしがらみ》は、「千代の色」「槻のわか葉」「花のちり塚」「上津ノ花」「氷魚村君」の草稿五編からなるが、この内、「千代の色」は文政六年春の日記《笹ノ屋日記》に

なっている。

全集第十巻掲載の《笹ノ屋日記》は、《風の落葉二》の「笹ノ屋日記」と、本冊子にある「千代の色」を合わせて収められたものである。そのため、《筆のしがらみ》が装幀された年代の上限は、「千代の春」の文政六年三月となる（実際は三月二十四日まで書かれているが、本稿では月までの記述に止める。以下も同じ）。

なお、全集第十一巻解題・697頁では、「次の《槻のわか葉》は、冒頭に《夏のまき》とあり、文政七年の日記である」とする。しかしながら、「槻のわか葉」の文中に「此わたりの事は、春のまき《筆の山口》といふ日記にも書つれど」とあり、「文政五年壬午春」の序文を持つ《筆の山口》に続いて書いているとすることから、文政七年ではなく文政五年の間違っていることが明らかになっている。

④ 飛鳥山碑銘乾隆帝御纂文集中鹿角之記

全集第十二巻・図版（210）に目次が示されていることからわかるが、真澄の筆跡で「大江戸 飛鳥山ノ石碑」「乾隆帝御纂文集中 鹿ノ角ノ」とある。内容はすべて他筆と考えられ、真澄の直筆は筆者にかかわる「津軽」「松前福山城下稻荷社家」の朱筆だけである。

年代で確認できるのは、飛鳥山碑銘を「津軽」の斎藤規宏

が書写した寛政三年七月だけであるため、この書冊の装幀を推測する有力な情報とは言えない。

⑤ 房住山昔物語

この冊子の装幀時期について、全集十一巻解題で内田武志は、「この書の装丁は次の点で文政七年と推測されるが、：表紙と裏貼り用紙の一枚が、『さくらがり』下巻の「八重一重桜」の草稿断葉であり、その紙の「柱」に「さくらがり」二とあるからである」とする。これは、『さくらがり下』が文政七年に装幀されたことを前提にしている。

ここで内田が書く「表紙と裏貼り用紙の一枚」とは反故紙を指しているようだが、現在では修復されているため、書かれた内容を確認することができない。しかしながら、『さくらがり下』が装幀された年代の上限は、「⑧ さくらがり下」で後述するように、文政七年三月である。よって、本冊子が装幀された年代の上限も文政七年三月となる。

⑥ 雪の出羽路雄勝郡小野の七里

本冊子の巻末に、杉宮別当吉祥院快純による、吉祥院の歴世、縁起、宝物などの書き上げ文書を真澄が写している。この書き上げ文書には、「文政五年壬午六月」の年紀が書かれており、その実際は、全集第十一巻・図版〔119〕で確認できる。

よって、本冊子の装幀された年代の上限は、文政五年六月となる。

⑦ 花のいではち松藤日記

表表紙裏打紙に、『笹ノ屋日記』文政六年二月一日から六日までの草稿がある。この表表紙裏打紙（つまり反故紙）は、現在、冊子に綴じ合わされており、翻刻は、全集第十二巻・107頁にある通りである。

よって、本冊子の装幀された年代の上限は、文政六年二月となる。

⑧ さくらがり下

真澄は本冊子に、四十五項目にのぼる桜についての見聞を書いている。その第十七項目「錦木の里さくら」には、鹿角にある錦木の里を、笹原寺（本誓寺）の是観上人が見に出かけるのに際して歌を詠んだことが記されており、その日付を文政七年三月の末の日だとしている。

よって、本冊子の装幀された年代の上限は、文政七年三月となる。

⑨ 久保田の落ち穂

本冊子をまとめた時期について、序文に、「文政五年といふとしの秋の夜の長野といふところに在りて」としている。秋は旧暦の七月～九月で、久保田の長野町とは現在の秋田駅

西口付近のことである。

なお、『筆のまにまに六』「高志のものがたり」には、長野町の小野寺氏に寄寓していたとき、良寛の弟である山本由之の来訪を受けたのが、文政五年五月八日だったとある。ここでいう小野寺氏とは、『長野先生夜話集』で知られる小野寺道維の屋敷で、当時の当主は小野寺道定であった（当館「広報紙真澄No.20」）。《久保田の落ち穂》を完成させた文政五年の秋も、真澄はいまだ小野寺氏のもとに留まっていたものであろう。

本冊子が装幀された年代の上限は、文政五年秋となる。

⑩ 椎の葉

「地藏順礼記」という項に「こたひ、文政七年甲申の秋八月廿四日、こゝろさして、山本ノ郡河戸川の大塚寺尊英師、人々をいざなひ巡り始めるが、その地藏大士の尊像無キ寺々もありといへり」（全集第十一巻・267頁）とある。

また、「平鹿ノ郡」の項に、「文政七年といふとしの秋きの申の八月 菅江真澄しるす」（全集第十一巻・272頁）の年紀と署名がある。

よって、本冊子が装幀された年代の上限は、文政七年八月となる。

⑪ 高志栞

「てまり上人」の項に、「手鞠上人は出雲崎の橘屋ノ由芝②「三井氏門葉也」がはらから「弟也」。名を良寛といふ」（全集第十一巻・298頁）とある。内田武志は、全集解題（同巻・678頁）で、「真澄が文政五年夏に面談した良寛の弟、橘屋由之から聞いた話だったろうか」としている。山本由之（通称橘屋新左衛門）が真澄を訪ねたのが、文政五年五月八日であったことは、本節「⑨ 久保田の落ち穂」で述べたように、『筆のまにまに六』（全集第十巻・168頁）にある。

また、最後から二つ目の項目に「頸木ノ郡大鹿ノ里ノ民、文政四年のころ」から始まる文章で、天狗に連れ去られて二十年後に戻った農民の話がある。この話について真澄は、『筆のまにまに九』「天狗ものがたり」に、本誓寺住職是観上人が越後の故郷から帰って来たときの話だったとしている（全集第十巻・234頁）。文政五年の春の日記《筆の山口》二月二十五日には、是観上人が、故郷である越後国蒲原郡三条に東本願寺門主が三月半ばに来るといので旅立ったとしている（全集第十一巻・473頁）。帰ったのは、本節「⑭ 風の落葉二」で述べるように、文政五年十月であった。

一方で、『高志栞』の解題によると、全二十九丁のうち、第二十四丁から第二十九丁の料紙六枚については白紙だとする（大館市立中央図書館が公開しているデジタルデータでは

確認できないが、資料を実見したところ、解題の通りであった。すると、冊子を綴じ合わせてから書き加えていった可能性も否定できないものの、前述の事柄から、本冊子の装幀の年代の上限を、文政五年十月とここでは考えておきたい。

⑫ 陸奥国毛布郡一事

全集第十一巻解題に、本資料の印章のことが書かれている。そこには、「なお明治初年、これを入手した羽生氏熟が〈緑雨山房印〉の小判印を、表紙の題簽下方に捺し、さらに表紙の裏紙をも剥いで、そこに〈緑雨山房印〉の角印を捺している」とある。

ここでいう「表紙の裏紙をも剥いで」というのは、表紙の見返し部分を剥いているということである。「その剥がれた表紙裏紙は、真澄が〈陸奥国毛布郡一条〉と題字した反古紙である。これによって、この一文編集の時期は、《花の出羽路秋田郡》《花の出羽路山本郡》、そして《月の出羽路河辺郡》などと同じく、文政七年のころと推測されるのである」としている（全集第十一巻・699頁）。

ここで注目したいのは、冊子の外題が「陸奥国毛布郡一事」で、見返しとして表紙に貼られていた内題（全集では「表紙裏紙」）に「陸奥国毛布郡一条」と書いていることである。このことは、大館市立中央図書館で公開しているデジタ

ルデータ（ホームページ）でも確認できる。

一方、全集第八巻の口絵に示された《花の出羽路秋田郡》の内表紙が「秋田郡一件」、《花の出羽路山本郡》の表紙が「山本郡一條」、《月の出羽路河辺郡》の表紙が「月のいでは路上巻 河辺郡一事」とあり、「陸奥郡毛布郡」に付された「一事」や「一條」との一致を見ている。このことから、《陸奥国毛布郡一事》は、《花の出羽路秋田郡》など三冊と同じような時期に装幀されたことが推測できるのである。

ところで、《花の出羽路秋田郡》など三冊が装幀された時期については、全集第十一巻の解題で、内田武志がさまざまに挙げている。

この中で、《月の出羽路河辺郡》「豊巻村」の項に、「九八か事は窪田ノ落穂見てつはらかにしるべし」（全集第八巻・398頁）とあるのは、文政五年秋の序文を持つ《久保田の落ち穂》「たちのゝまき」で確認できる。

また、《花の出羽路秋田郡》「表表紙裏」（つまり反故紙）に「立野ノ牧」の項があるのだが、その冒頭に「落穂三人」とある。他資料の例から考えると、おそらく天註部分に朱字で書かれたものと推測するが、これは、この項目を《久保田の落ち穂》への書き写しを済ませたとする註記である。このことは、《久保田の落ち穂》「たちのゝまき」にほぼそのまま引用された

ことからわかる。よって、《久保田の落ち穂》が清書されてからの装幀であることがわかるのである。

《陸奥国毛布郡一事》の装幀についての論証が長くなったので、もう一度繰り返すと、その書名の類似性から《花の出羽路秋田郡》などの地誌草稿の三冊と同時期とみなされることを前提として、特に《花の出羽路秋田郡》の本文、および「表紙裏」にある記述が、文政五年秋の序文を持つ《久保田の落ち穂》の後に装幀されたことが立証された。

内田武志は文政七年と推測しているが、以上のことから、資料から立証できるのは、《陸奥国毛布郡一事》が装幀された年代の上限が文政五年秋ということになる。

⑬ 風の落葉一

全集第十二巻・127頁（「裏書・貼紙資料」部分）によると、「裏表紙裏」に「笹ノ屋集」と書かれた断葉がある。真澄の書屋名が「笹ノ屋」に変わるのは、《笹ノ屋日記》冒頭部分から文政五年冬と考えられている（全集第十二巻・541頁、全集第十巻・427頁）。

よって、装幀された年代の上限は、文政五年冬と考えられる。

なお、《風の落葉二》の解題には、「第三三丁表裏は、〈河辺郡大戸村〉の地誌。柱に〈川辺郡大戸村 一 中キタデ 一〉

とある。松淵伊三郎正治の家で書いた文政七年三月の日記（つきのわかば）（《ふでのしがらみ》所収）の記事に対応する」とある（全集第十一巻・661頁）。ここにある「文政七年」は、《筆の山口》序文の年紀、それに《筆のしがらみ》「楓のわか葉」にある記述から文政五年の間違いである。このことは「③ 筆のしがらみ」でも述べた。

⑭ 風の落葉二

是観上人が真澄に「空海上人の書法」について語ったのが、「文政五年ノ冬十月究竟院是観上人坂京の後の茶話也」とある（全集第十一巻・58頁）。これに先立つ同年二月二十五日、是観が故郷の越後国蒲原郡三条に向かうことが《筆の山口》に書かれていた（全集第十一巻・473頁）。是観上人の故郷の地で、三月半ばに東本願寺の門主が来るために帰るのであった。その後、是観上人は京都に上ったのである。そのことがはじめからの予定であったことは、真澄の著作である《水魚の村君》を東本願寺に献上するため、真澄が二月に清書していたことから知られる（《筆のしがらみ》全集第十一巻・499頁、《水魚の村君（異文）》全集第四巻・197頁）。

《風の落葉二》の装幀の上限が文政五年暮れであることは、この書冊に書かれた《笹ノ屋日記》から知ることができる。

本節「③ 筆のしがらみ」でも述べたことだが、全集第十巻に収められた《笹ノ屋日記》には、同名の書冊というものは無い。全集編纂時に、《風の落葉二》にある残簡と《筆のしがらみ》にある残簡とを合わせたものである。《笹ノ屋日記》を構成する《風の落葉二》は文政五年十二月三十日までのごくわずかである。この日付が、《風の落葉二》を装幀した年代の上限となる。

⑮ 風の落葉三

考証随筆の下書きがあり、それには「筆随筆三入」や「筆のまに／＼入」などとして、《筆のまにまに》に取り入れたとする朱書がある。このほか、山本郡や仙北郡などに関する覚書がある。ただし、これらは書かれた年代を特定するものではない。

この《風の落葉三》については、当館に表表紙裏打紙を書き写した資料がある。これまで発表されていない資料のため、詳細については本稿末に写真（資料2）を示しながら紹介する。これには、《笹ノ屋日記》文政六年二月十七日から二十日にかけての文章の草稿がある。

よって、本資料が装幀された年代の上限は文政六年二月となる。

⑯ 風の落葉四

全集第十一巻解題に、次のようにある。「第五丁表にはこの覚書の年次を知る短文がある。秋田郡水ノ口村佐藤文右衛門女房が行方不明となり、へ其子、今ノ文右衛門となりて、文政七年の夏六月十二日、そは孝子にて此事くとき語れり」という一条である」（全集第十一巻・669頁）。本文は、全集第十一巻・164頁にある。

よって、本資料が装幀された年代の上限は、文政七年六月となる。

⑰ 風の落葉六

全集解題に、「第三丁表／＼第四丁表はへ平鹿郡」の序文。文政七年八月、平鹿郡の調査に出発する以前に書いたものである」とある（全集第十一巻・670頁）。

よって、本冊子が装幀された年代の上限は、文政七年八月となる。

七 茶色白格子模様表紙の装幀時期（まとめ）

前節で述べたことから、茶色白格子模様表紙が装幀された年代の上限を、次のようにまとめてみる。（一）内は、年代の上限を決める際の根拠としたものである。

ただし、後述するように、反故紙および当該冊子の本文等から相互の関連性を加味して、年代の上限を調整しなくては

ならない。そのため、左に示すのは【仮】である。

【仮】

- | | |
|---------------------|---------------|
| ① かすむ駒形 | 不明 |
| ② はしわの若葉 | 不明 |
| ③ 筆のしがらみ | 文政六年三月（本文） |
| ④ 飛鳥山碑銘乾隆帝御纂文集中鹿角之記 | 不明 |
| ⑤ 房住山昔物語 | 文政七年三月（反故紙） |
| ⑥ 雪の出羽路雄勝郡小野の七里 | 文政五年六月（本文） |
| ⑦ 花のいではち松藤日記 | 文政六年二月（反故紙） |
| ⑧ さくらがり下 | 文政七年三月（本文） |
| ⑨ 久保田の落ち穂 | 文政五年秋（序文） |
| ⑩ 椎の葉 | 文政七年八月（本文） |
| ⑪ 高志栞 | 文政五年十月（本文） |
| ⑫ 陸奥国毛布郡一事 | 文政五年秋（題名、反故紙） |
| ⑬ 風の落葉一 | 文政五年冬（反故紙） |
| ⑭ 風の落葉二 | 文政五年十二月（本文） |
| ⑮ 風の落葉三 | 文政六年二月（反故紙） |
| ⑯ 風の落葉四 | 文政七年六月（本文） |
| ⑰ 風の落葉六 | 文政七年八月（本文） |

ここで、話題を真澄が医者であることの立証に使った《花のいではち松藤日記》《風の落葉一》《さくらがり下》《風の落葉二》の四冊に戻したい。

その反故紙は、現在の大館市と北秋田市の各地で、真澄が医療行為をおこなっていたことを示すものであった。それらが、もともと一冊の書冊が解体されたものであることは、大福帳様式という形態と大きさ、医療行為を示した内容、それに四冊が同じ茶色白格子模様表紙であることから推測したことであった。

一冊の書冊が解体されて、その料紙が反故紙として使われるのに際し、年代が空くことはないと考えられる。そのため、⑦⑧⑬⑭の四冊は装幀年代の上限をそろえる必要があるだろう。すると、四冊の装幀年代の下限（新しい年代）である《さくらがり下》の文政七年三月が適当となる。

右の例と同様に、⑦と⑮の反故紙は《笹ノ屋日記》の草稿で、しかも連続した時期のものであった。よって、「⑮風の落葉三」も《さくらがり下》と同様、文政七年三月が装幀された年代の上限となる。

よって、右のように、相互の関連性を加味した上で装幀年代の上限を調整すると、次のようになる。

- ① かすむ駒形 不明
- ② はしわの若葉 不明
- ③ 筆のしがらみ 文政六年三月（本文）
- ④ 飛鳥山碑銘乾隆帝御纂文集中鹿角之記 不明
- ⑤ 房住山昔物語 文政七年三月（反故紙）
- ⑥ 雪の出羽路雄勝郡小野の七里 文政五年六月（本文）
- ⑦ 花のいではち松藤日記 文政六年二月（反故紙）
↓文政七年三月
- ⑧ さくらがり下 文政七年三月（本文）
- ⑨ 久保田の落ち穂 文政五年秋（序文）
- ⑩ 椎の葉 文政七年八月（本文）
- ⑪ 高志葉 文政五年十月（本文）
- ⑫ 陸奥国毛布郡一事 文政五年秋（題名、反故紙）
- ⑬ 風の落葉一 文政五年冬（反故紙）
↓文政七年三月
- ⑭ 風の落葉二 文政五年十二月（本文）
↓文政七年三月
- ⑮ 風の落葉三 文政六年二月（反故紙）
↓文政七年三月
- ⑯ 風の落葉四 文政七年六月（本文）
- ⑰ 風の落葉六 文政七年八月（本文）

右のことから、茶色白格子模様表紙が装幀された年代は、文政五年秋から文政七年八月までの二年ほどの間と推測できることになる。

内田武志は、これらが一度におこなわれたことを前提にして、装幀が文政七年であつたとしている。その可能性も否定できず魅力的な論ではあるが、これまで本稿で論証してきたことから、茶色白格子模様表紙の装幀が文政五年秋から文政七年八月までにおこなわれたとしか言うことはできない。

では、この二年ばかりの間に、十七冊にもよる冊子をまとめて装幀したことは何を意味するのだろうか。

真澄は、文政七年八月から平鹿郡の地誌編纂のための巡村調査を始めて、文政十二年七月十九日に仙北郡内で亡くなるまで、平鹿郡、引き続き仙北郡の巡村調査と執筆をおこない、それらは《雪の出羽路平鹿郡》十四冊、《月の出羽路仙北郡》二十四冊として結実して現在に伝わっている。その間、書齋にしていた「笹ノ屋」を引き払ったものと考えられる。

平鹿郡の巡村調査に赴くことを前にして、真澄は、書齋にあつた雑纂に分類されるような草稿、メモ類などを整理した。それが茶色白格子模様表紙の十七冊（現存）なのではなかったかと考えられるのである。

まとめ

本稿では、真澄が医者（くすし）であったことを証明する『花のいではち松藤日記』の反故紙を手がかりに、昭和二十八年に記録された三冊の反故紙と合わせて、文政二年から同四年にかけて、現在の大館市や北秋田市を中心として、真澄が医療行為をおこなっていたことを立証した。

さらに、右の四冊が同じ模様の表紙（茶色白格子模様表紙）であることに注目し、合わせて十七冊もの同模様の冊子が、少なくとも文政五年秋～文政七年八月の間に装幀されたものであることを述べた。装幀年代を推測する過程で、本文のみならず反故紙を理由に挙げることもなかった。

反故紙とは、いわば書き損じ、あるいは真澄にとっては不要となった紙であるのだが、真澄の生涯や人物像を探る私たちにとっては、興味深い情報を提供してくれる資料であることがわかった。

それら資料の細部をつなぎ合わせることで、考察を加えることで、これまでの断片的な事柄がつながりを持つことを知ることができた。

真澄研究をおこなった白井永二氏（元鶴岡八幡宮宮司）が、かつて「秀雄は故郷を語っている」（秀雄は真澄以前の名乗）

を論考のタイトルにしたことがあった（おうふう『菅江真澄の新研究』）。「秀雄は故郷を語っている」は、私が真澄を学習し、真澄のことを考えたりするたびに、心に引っかかってくる言葉である。その真澄の語りかけが聞こえないのは、まだ読み取りの未熟さがあるからなのだろうと考えるからである。

本稿で話題にした反故紙や茶色白格子模様表紙など、これまであまり話題にしてこなかった資料にも目を向けながら、何か見落としていることはないか、真澄の語りに寄り添って物事を考えているかなど、虚心になつて考察を進めていきたいと思う。

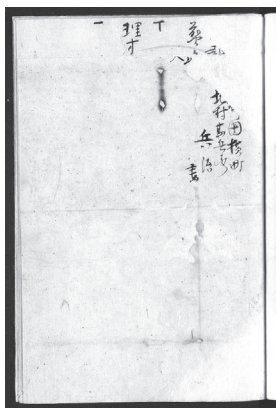
（秋田県立博物館・主任学芸主事）

(資料1)

《花のいではち松藤日記》表表紙裏打紙

八峰町・山崎照雄氏蔵

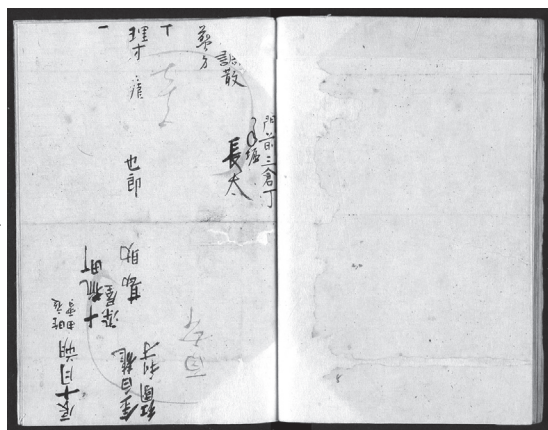
ア上



一 理才 丁 煎方

北村甚兵衛
兵治 妻
田横町

イ上



一 理才 丁 煎方
調散

門前三倉丁
かね堀
長太

(七十五)

也郎

辰十月朔「昨夜由雪」

十狐町
染屋

金白竜
紅国利才

勘助

(百五十)

イ下

ウ上

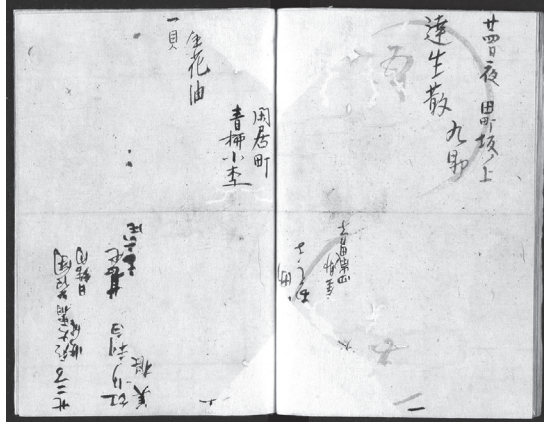
廿四日夜 田町坂ノ上
九助
達生散

(五) 不 明

(五) 不 明

□町 不
おはノ子
金助
四歳男子

エ上



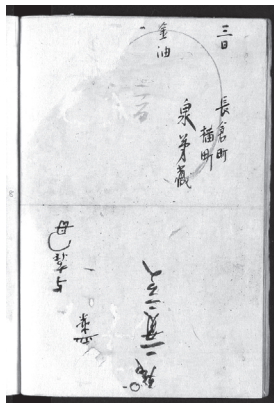
金花油
一頁
閑居町
青柳小左

廿三日 朝大霜 花岡
快晴 日詰内
紅州利白
美根 甚七
甚六下モ

ウ下

エ下

才上



三日 長倉町 横町
泉弟蔵
金油 (二百)

血薬
与右衛門母
○残二貫二百匁

才下

(資料2)

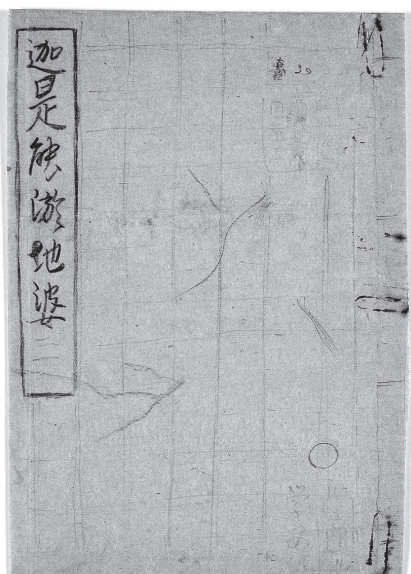
《風の落葉三》表紙裏打紙 当館・内田文庫蔵

当館が所蔵する「内田文庫」には、《風の落葉三》を鉛筆で写したものがある。これは、昭和二十年代の初め、病氣のために動くことができなかった内田武志（真澄研究者）に代わり、妹ハチをはじめとする支援者が、真崎文庫のある大館に通い、当時栗盛教育団に保管されていた（この時点での所蔵は栗盛家）自筆本を、子細に鉛筆で写したものである。

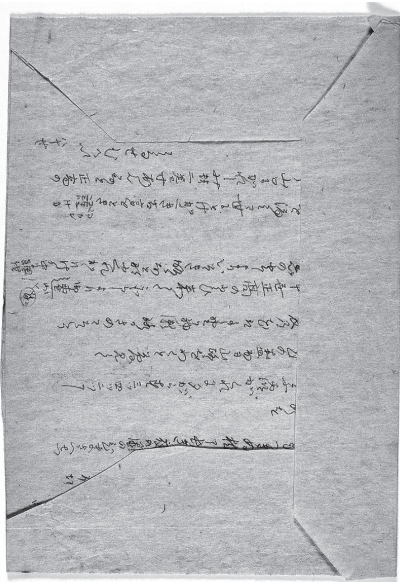
《風の落葉三》の写しには、表紙を丈夫にするために裏打ちされた反故紙までもが写されている。

内容は写真で示す通りだが、表表紙としては、表紙となった料紙のほかに、反故紙が一枚（裏は白紙）綴じ込まれている。また、裏表紙としては、裏表紙となった料紙のほかに、反故紙が二枚ある。そのうち、外側（裏表紙側に綴じ込まれている）の一枚は裏が白紙で、内側（本体側に綴じ込まれている）には表裏に書き込みがある。このように、表と裏のそれぞれの表紙に厚さを出すために反故紙が使われていたことがわかる。

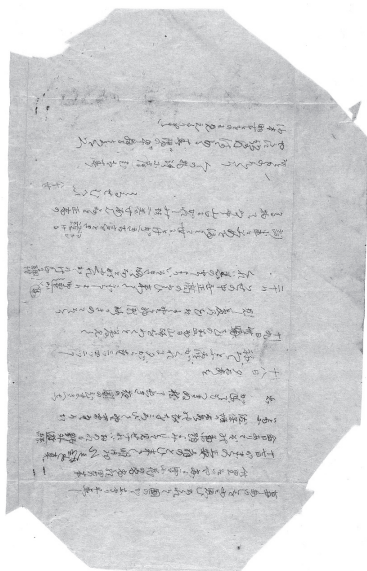
なお、表表紙の内側にある反故紙は《笹ノ屋日記》の草稿である。全集にも翻刻されていないことから、ここに翻刻するものである。



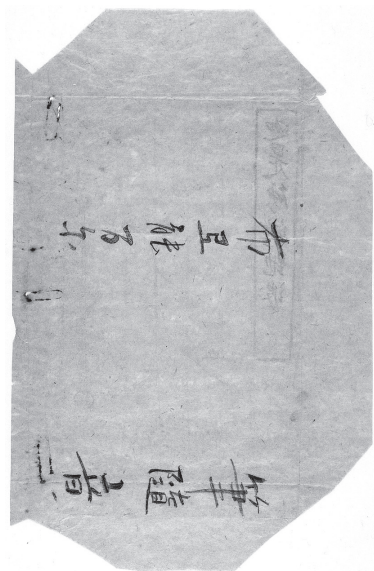
1. 表表紙



2. 表表紙の裏返し（全体）

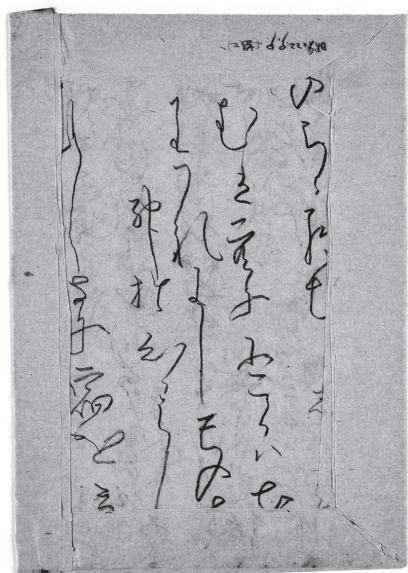


4. 表表紙の裏打紙（裏は白紙）【後掲で翻刻】



3. 表表紙の裏

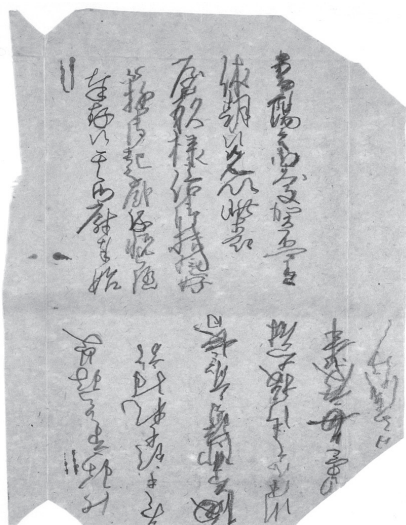
「昭和 22. 9. 9 敬二」



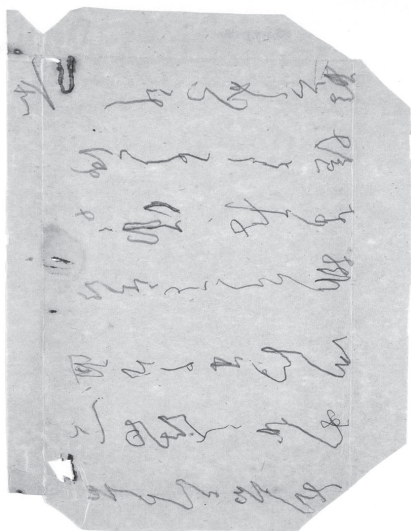
6. 裏表紙の裏返し（全体）



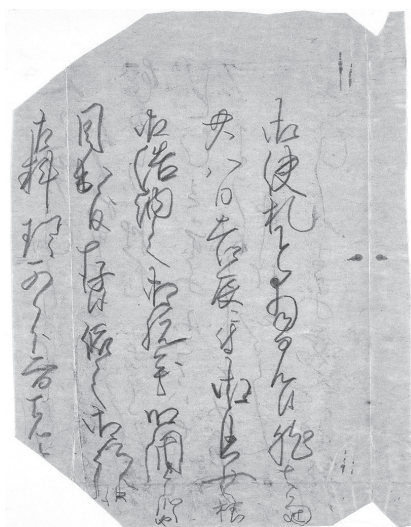
5. 裏表紙



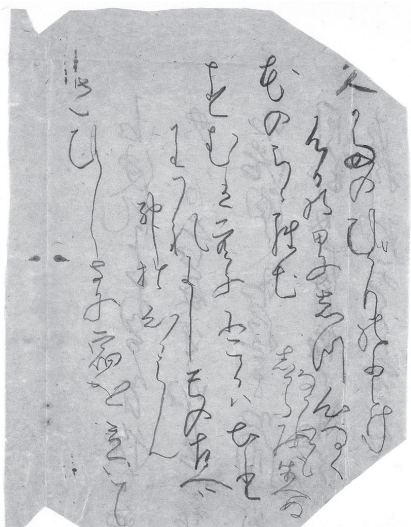
8. 裏表紙の裏打紙〈外側〉(裏は白紙)



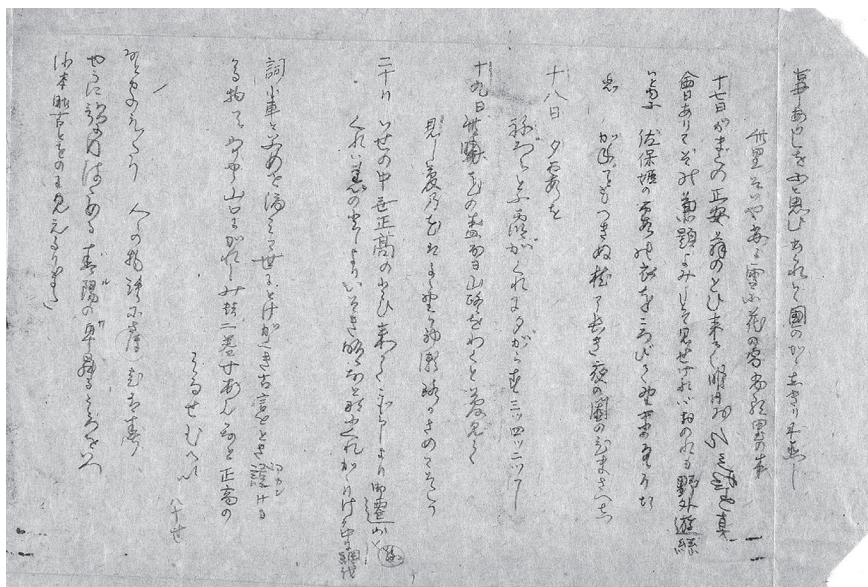
7. 裏表紙の裏



10. 裏表紙の裏打紙〈内側〉の裏



9. 裏表紙の裏打紙〈内側〉



4. 表表紙の裏打紙（翻刻のために90度左回転）

事ありしを、ふと思ひ出られて、国のかたしきりに恋し

此里はいやふる雪に花の雪ふる里の春

十七日 かまたの正安翁のとひ来て明日なんみななどの真

会ありて、その兼題よみしとて見せければおのれも野外遊糸

いとゆふ 佐保姫の霞の衣をころびて野末の空にな

恋 かねごともしきぬ枕に長き夜の闇のひまさへし

十八日 夕霞を

ねぐらとふ霞がくれに夕がらす三ツ四ツ二ツこ

十九日 此暁、花の盛なる山路をわくと夢見て

見し夢の花はるゝ野の初瀬路かさめてぞた

二十日 いせの中西正高のとひ来て、ことしより御遷宮

くればれいのとしよりいそぎ賑るなど、なにくれかたりける中に網代

詞ノ小車といふめをあみて、世にとけがたき古言をとき證ける

かる物ぞ尚や、山口にかなしみ茲二卷寸あらんかなど正高の

みなせむへい 八十世

など聞えたり。人々の物語にさほひはす

やうに歌にははためる春陽の早昇ころをいつ

詠本□ことをのみ見えるがまた

※反故紙を鉛筆で写していることなどから、文章の下部がなく、また、

意味が通じないところがある。内容のほとんどは、『笹ノ屋日記』文

政六年二月十七日から二十日にかけての草稿であるが、最後の四行が

何に該当するかは不明である。

真澄研究 二十一号

平成二十九年三月二十四日発行

編集・発行

秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇〇二二四

秋田市金足鳩崎字後山五二

